



# 日本人のよんだ 漢籍

貴重書と和刻本と

君子子乎  
不亦樂乎  
而時習之  
不亦  
樂乎

子曰時習之不亦樂乎  
子曰時習之不亦樂乎  
子曰時習之不亦樂乎  
子曰時習之不亦樂乎

子曰學而時習之不  
亦樂乎  
子曰學而時習之不  
亦樂乎

子曰學而時習之不  
亦樂乎  
子曰學而時習之不  
亦樂乎

子曰學而時習之不  
亦樂乎  
子曰學而時習之不  
亦樂乎



平成23年度筑波大学附属図書館特別展

# 日本人のよんだ漢籍

## 貴重書と和刻本と

会期 平成23年9月22日(木)～10月21日(金)

会場 筑波大学附属図書館(中央図書館貴重書展示室)

共催 筑波大学附属図書館

筑波大学大学院人文社会科学研究科

## 凡例

- 一、本書は、筑波大学附属図書館において、平成二十三年九月二十二日（木）から十月二十一日（金）まで開催される特別展「日本人のよんだ漢籍―貴重書と和刻本と―」の解説付き図録である。
- 一、本図録に掲載されている資料は、すべて筑波大学附属図書館が所蔵している。
- 一、作品番号は、展示会場での陳列番号と一致するが、陳列の順序とは必ずしも一致しない。また、一部の展示資料については、本図録への掲載を割愛した。
- 一、掲載資料の表題等の書誌情報や解題等の漢字表記は、原則として通行の字体に改めた。
- 一、図書解題は、左記の分担執筆により、執筆者を文末に示した。  
清登典子（人文社会科学研究所教授）、谷口孝介（人文社会科学研究所教授）、稀代麻也子（人文社会科学研究所准教授）、加藤文彬（人文社会科学研究所博士課程）、馬耀（人文社会科学研究所博士課程）、篠塚富士男（附属図書館情報管理課長補佐）、住吉朋彦（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫准教授）
- 一、堀川貴司氏（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授）、森岡ゆかり氏（京都女子大学非常勤講師）の助言を得た。記して謝意を表す。
- 一、本特別展では、平成二十二年度人文社会科学研究所プロジェクト「筑波大学附属図書館所蔵和刻本漢籍の基礎的研究」（代表、清登典子教授）および平成二十三年度人文社会科学研究所プロジェクト「筑波大学附属図書館所蔵和刻本漢籍の体系的調査研究」（代表、清登典子教授）の研究成果を活用している。

目次・展示書リスト

ページ	目次			
1	附属図書館長ご挨拶			
2	人文社会科学研究所長ご挨拶			
3	概説			
5	一、聖賢のいさげ			
7	【一】 論語集解 十卷五冊	□ 860-12	貴	
8	【二】 論語集解 十卷二冊	□ 860-16	貴	
8	【三】 論語集註 零本(巻一)一冊	□ 860-28	貴	
9	【四】 論語 十卷二冊	□ 860-13	貴	
9	【五】 論語 十卷二冊	□ 860-26	貴	
9	【六】 古文孝経 一卷一冊	123.7-Ko14	貴	
10	【七】 孝経 一冊	□ 850-126	貴	
10	【八】 孝経 一冊	□ 850-14	貴	
11	【九】 孝経 一冊	□ 850-121	貴	
11	【一〇】 古文尚書 零本(存巻八)一冊	□ 815-1	貴	
12	【一一】 古文尚書 十三巻七冊	□ 815-46	貴	
13	二、文は「文集」、「文選」			
17	【一二】 文選 六十巻二十冊	ル 320-494	貴	
18	【一三】 文選 六十巻三十一冊	921.4-Sh95	貴	
19	【一四】 六臣註文選 六十巻六十一冊	ル 320-21	貴	
19	【一五】 白氏文集 七十一巻十四冊	ル 335-90	貴	
20	【一六】 白氏文集 七十一巻二十五冊	921.43-H19	貴	
21	【一七】 蒙求 一冊	イ 290-115	貴	
22	【一八】 新刻蒙求 三巻三冊	イ 290-6	貴	
22	【一九】 増註唐賢三体詩法 三巻三冊	ル 320-325	貴	
23	【二〇】 増註唐賢三体詩法 巻一(巻一・三欠)一冊	ル 320-485	貴	
23	【二一】 増註唐賢三体詩法 巻一(巻一・三欠)五冊	ル 320-487	貴	
24	【二二】 遊仙窟 一冊	ル 380-33	貴	
25	【二三】 遊仙窟鈔 五巻五冊	923.4-C52	貴	
25	【二四】 和漢朗詠集 二巻二冊	ル 246-17	貴	
26	【二五】 新編古今事文類聚 前集六十巻後集五十巻各目不分巻続集二十八巻別集三十二巻各目一卷新集三十六巻目不分巻外集十五巻遺集十五巻各目一卷一百冊	イ 290-212	貴	
27	三、日本漢文学一斑			
31	【二六】 歴聖大儒像(聖賢像軸) 六幅	721.4-Ka58	貴	
31	【二七】 鷲峰先生林学士全集 文集百二十巻目二巻・詩集百二十巻目三巻・附自叙略譜一卷百五冊	ル 295-13	貴	
32	【二八】 本朝一人一首 十巻五冊	ル 294-10	貴	
33	【二九】 史館茗話 一冊	ル 290-2	貴	
33	【三〇】 菅家文章 十二巻三冊	ル 295-1	貴	
34	【三一】 菅家後草 一冊	ル 295-2	貴	
35	【三二】 鈴木虎雄関係史料 より 四件	919.6-Su96	貴	
	「杜詩訳解成題後二首」ほか 一状			
	「杜詩訳解成自題其後」一状			
	「豹軒退休集葯房主人歌草先後刊成志感二首」一色紙			
	「山鹿素行先生宅址銅像」一色紙			

※ 「貴」は貴重図書を示す。

## 附属図書館長ご挨拶

附属図書館特別展「日本人のよんだ漢籍」に寄せて

附属図書館では、これまで学内組織の協力を得ながら、本学が所蔵する貴重書、和装本、古地図などを広く公開する展示事業をほぼ毎年行ってきました。前年の平成二二年度には、「慈雲尊者と悉曇学」と題して、前身校から継承してきた和装古書のうち、江戸後期に活動した名僧、慈雲尊者飲光の自筆本を含む関係書目を展示し、好評を博しました。

今回の特別展は、人文社会科学研究所文芸・言語専攻の谷口孝介先生のご指導のもとに、「日本人のよんだ漢籍」と題して、本学所蔵の貴重本のうちから漢籍を中心に展示するものです。

漢籍とは、通常、漢文で書かれた中国の書籍を指します。仏典の類は含まれず、儒教関連の図書で、一般的に、近代になって新しい学問体系にしたがって書かれたものは含まれないようです。また、漢籍には、日本人が漢文で書いたものも含まれることもあるようですが、中国で出版されたものは特に「唐本」と称し、それを日本で復刻や翻刻したものを「和刻本」と呼んでいます。

今回の展示のなかにもこの「和刻本」が多く含まれています。『論語』、『文選』、『白氏文集』など古代から近世まで日本人にとって漢籍は身近なものでした。その漢籍が一般の日本人に普及するにあたって、和刻本の役割はきわめて大きなものがありました。漢籍の世界を改めて見直すすべとなるでしょう。

また、今回は関連展示として、昭和三六年度の文化勲章受章者で、中国文学研究者の鈴木虎雄博士（昭和三八年逝去）の関係史料の一部を紹介することといたしました。縁あって昨年三月に関係史料七六四点（六一二冊）が、ご子孫から附属図書館に寄贈されたものです。

この「鈴木虎雄関係史料」は、昨年夏に整理を終え、「鈴木虎雄文庫」として貴重図書に指定されたもので、多数の自作の漢詩文、書簡や履歴書、各種の辞令など、他館にはない、虎雄にとって最も身近で貴重な史料が含まれています。

本学に蓄積された豊かな「知」を積極的に内外に向けて発信する、という附属図書館の取り組みの一つとして、多くの方々にご高覧いただければ幸いです。

平成二三年九月

附属図書館長 波多野 澄雄

## 人文社会科学研究所長ご挨拶

### 附属図書館特別展「日本人のよんだ漢籍―貴重本と和刻本と―」に寄せて

平成二三年度筑波大学附属図書館特別展「日本人のよんだ漢籍―貴重本と和刻本と―」が、このたび開催の運びとなりました。この特別展は、本学の多くの館蔵貴重本のうちから、日本人が古代から近代まで愛着をもって読み、接してきた漢籍の、主要な貴重書と和刻本を選んで展示するものです。

展示は、三つのまとまりから成っています。

ひとつは、聖賢の言葉を記録した書物に関する様々な注釈本としての漢籍です。『論語集解』（魏の学者たちによる注釈）や『論語集註』（宋代の朱子による注釈）、『古文孝経』（曾子の門人が記した孔子の言動）などが含まれます。

ふたつめは、中国の様々な〈文学〉作品です。『文選』（中国南北朝時代の詩文集）、『白氏文集』（唐の白居易の詩文集）、『蒙求』（七四六年唐で編まれた故事集）、『遊仙窟』（唐代の伝奇小説）などが、展示されます。

そしてさいごに、〈日本漢文学一斑〉と題し、『歴聖大儒像（聖賢像軸）』（湯島聖堂に配祀された凶像）、『鶯峰先生林学士全集』（江戸期の儒者林鶯峰の全集）、『菅家文草』（菅原道真の自作漢詩文集）、鈴木虎雄関係史料（東京高師、京都帝大の教授を歴任した中国学者、漢詩人、歌人）などを、ご覧いただきます。

これらの展示を通してわれわれは、いかに日本人が漢籍に愛着をもってきたかを理解すると同時に、日本人と漢語文化の関わり妙にも思いをいたすことになるでしょう。たとえば和刻本に施してある訓点は、アルファベット言語に対しては到底不可能な〈読み〉をもたらします。訓点付きの和刻本は、漢籍という外国語の本を日本語として読ませており、日本人にとって漢籍を読むとは、同時に他者との対話であり自分との対話でもあるといえます。そうやって日本人は、今回展示されている様々な和刻本などをとおして、出版文化が開いた江戸時代においてすでに（あるいはずっとそれ以前から）、同時にローカルでかつグローバルでありうる対話の可能性を探っていたのかもしれない。そしてそのことはわれわれに、アジアの時代へと向かってゆく現代の世界にあつて、新たな発想のヒントを汲むように促しているのかもしれない。

特別展の期間中の九月二四〜二五日には、本学において、和漢比較文学会による全国規模の大会も催されます。漢語文化圏の新たな古典学をめざすという意味で、本特別展と趣旨を同じくするものです。

特別展「日本人のよんだ漢籍―貴重本と和刻本と―」への、多数の方々のご来館を、お待ちしております。

平成二三年九月

人文社会科学研究所長

川那部 保明

## 概説

日本人と漢籍との関係は、考えてみると、少し奇妙なものである。漢籍とは大づかみに捉えておくと、仏教経典を除いた中国において中国の言語で著述された典籍を言う。日本人は、自身にとって外国語である中国語で記された典籍を、すべてを日本語に置き換えて享受するのではなく、訓読という独自のシステムでもって、中国語の字面はそのままにして意味を取るといふ読書の方を案出したのである。日本における訓読がまったくの独創でないことは、近時金文京氏が言う通りであるが、現代に至るまでこの読解システムをもつて外国語文献である漢籍を、比較的自由によむことができる事実は、やはり驚くべきことと言わなくてはならない。平安時代前期の物語『うつほ物語』（蔵開・中）に仲忠が漢詩を帝前で朗読する場面がある。そこでのよみ方が「ひとたびは訓（日本語訳）、ひとたびは音（中国語）によませたまひて」と言うもので、今日に至る日本人の漢籍享受のあり方の原型が窺えるものである。つまり中国語をすべて日本語に置き換えてしまうのではなく、シニフィアンとしての中国語の姿を留めつつ、日本語として享受すると言うあり方である。

ことは中国における外国文献の享受の様相と対比すると明確である。たとえば三蔵法師玄奘がインドへの取経の旅を終え、唐朝に仏教経典五百二十夾六百五十七部を将来したと言う。これを記した『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』ではこれがフィナーレとなるわけではなく、皇帝太宗の後援のもと、大翻訳事業が遂行され七十五部千三百三十五巻の仏典が中国語に翻訳されたことをもつて、彼の偉業とするのである。楮遂良書で高名な太宗のいわゆる「聖教序」ももつぱら訳経事業を顕彰したものである。いっぽう日本のばあいは、空海をはじめとする入唐八家たちの詳細な「請来目録」が具わりますが、そこには日本語訳への指向は見出せない。今日に至るまで基本的に仏典は日本語に翻訳されずに漢訳のまま読誦され続けている。仏典ばかりではなく、漢籍将来においても同断であつて、吉備真備に漢籍将来目録が存したらしいことが知られている。そこにおいても言うまでもないことだが、漢籍を日本語へ置き換える発想は見られない。

このような日本人の漢籍受容の特徴を端的に示すのが、和刻本の存在である。和刻本とは日本において刊行された書物の謂いであるが、おもには漢籍の日本

版を言うものである。和刻本漢籍の大きな特徴のひとつに、返り点、読み仮名、送り仮名などの訓点を付したかたちで印刷されたことが挙げられる。日本における訓点の歴史は奈良時代に遡るが、平安鎌倉とさまざまに工夫を重ね、伝承されてきた訓読法によって、漢籍はよみ継がれてきた。今回の展示においても『論語集註』『古文尚書』『三体詩』など室町時代の点本にその様相を見得る。このような古鈔の点本を参照しつつ江戸期の和刻本が出版されるのである。一口に和刻本といってもさまざまな来歴をもつ。宋元明刊本を底本にしてそれを覆刻したもの（『文選』『孝経』など）、あるいはそこに古鈔点本を参照して訓点を付したもの（『白氏文集』など）、さらには中国ではすでに亡佚してしまつたが、日本にのみ伝存する本を底本として出版されたもの（『遊仙窟』など）などがそれであり、今回はそれら和刻本の諸相を展示することを意図した。

本展示は三部から構成される。漢籍の伝統的な図書分類に経史子集の四部分類があるが、第一部は経部つまり中国古代の聖賢たちの言行を記録した儒教の経典、第二部は集部つまり今日の観点から言う文学作品、第三部として、漢籍ではないが漢籍を受容して中国語で著された漢籍に準じた日本漢文の作品とした。それぞれの部において和刻本としての特質に差があるのは、それぞれの典籍の享受のされ方の違いによる。今各部の典籍の日本における享受のあり方を略述しておく。

唐制を継受した律令国家である古代の日本において、国家を支える官吏養成機関としての大学・国学で教授される学科の中心は、いうまでもなく儒教の経典であつた。儒教の徳治の精神を体現した官吏による統治が理念としてあつたのである。『養老令』（学令）では大学で教授すべき経書として、「凡そ経は、『周易』『尚書』『周礼』『儀礼』『礼記』『毛詩』『春秋左氏伝』をば一経と為よ。『孝経』『論語』は、学ぶ者兼ねて習へ」（原漢文）と見え、さらには教授にさいして使用すべき諸経の注釈をも次のように規定している「凡そ正業を教授するには、『周易』には鄭玄・王弼が注。『尚書』には孔安国・鄭玄が注。三礼・『毛詩』には鄭玄が注。『左伝』には服虔・杜預が注。『孝経』には孔安国・鄭玄が注。『論語』には鄭玄・何晏が注」。ただしこの条は基ついた唐令（『大唐六典』による）をほぼ引き写したもので、『令集解』の引く古注にも「鄭玄注は、今の読むところにあらず」というように、日本では実際に利用されていなかった注をも挙げていたのである。小島憲之氏によると、三礼（『周礼』『儀礼』『礼記』）、『毛詩』

は規定通り鄭玄注であるが、その他の実際に利用された注は、『周易』は王弼注、『尚書』は孔安国伝、『古文尚書』、『左伝』は杜預注、『春秋経伝集解』、『孝経』は孔安国伝、『古文孝経』、『論語』は何晏注、『論語集解』であったという。続いて「学令」では諸経を量の多少によって、『礼記』『左伝』を「大経」、『毛詩』『周礼』『儀礼』を「中経」、『周易』『尚書』を「小経」と類別し、修習の選択の組み合わせを規定しており、ことにその条の最後に「孝経』『論語』は、皆兼ねて通ずべし」とこの二経は必須であることを明記している。これと呼応するように、「孝課令」の明経科試験の評定基準の規定で「論語』『孝経』全く通ぜずは、皆不第と為よ」とあるように、この二経は律令官人のもつともスタンダードな經典とされており、習熟の度合いも高かったのである。

『養老令』よりも以前の『大宝令』では、これらの諸経以外に、『文選』『爾雅』の二書が経書に準じて加えられていたようである。現に「選叙令」では進士科の試験において、「進士には、明らかに時務に閑ひ、并せて『文選』『爾雅』を読む者を取れ」と選考基準に挙げられている。また「弘仁式」の諸経修習の日限規定に「三史（『史記』『漢書』『後漢書』）『文選』各々中経に准ぜよ」とあるように、中経相当の四百六十日の講説期間が設けられていたことが分かる。この背景には日本の令制における文章科の重視があつたものと思われる。いっぽうトネリコースを歩む下級官人や地方にまで『文選』が普及していたことが分かっており、上代の文学を支える裾野の広さを知ることができる。『文選』にも数種の注が存したが、経書ではないゆえ『令』に注の規定はない。ただこの書についても小島憲之氏によつて、初唐の李善注の利用が明らかにされている。平安時代承和期（八三四〜八四八年）以降の『白氏文集』の流行は周知のことであるが、ことに「新樂府」「長恨歌」「琵琶行」は単行してもはやされた。その末流に連なるものとして、【参考三】「琵琶行 附長恨歌」がある。登場人物の心情を和歌に託して挿入した古活字版仮名草子である。これも漢籍の究極的な受容のかたちと言えるだろう。

大学寮において毎年二月八月の上丁の日に行われていた積奠という儀式も、唐制に倣つたもので、積奠とは犠牲を供物として神前に捧げて祭ることをいい、孔子等を祭る儀式である。「学令」には、「凡そ大学・国学は、年毎に春秋の二仲の月の上丁に、先聖孔宣父（孔子）に積奠せよ」とあり、『続日本紀』文武天皇大宝元（七〇一）年二月丁巳（十四日）が初見である。こののち、養老・

天平期に二度入唐した吉備真備によつて儀式次第は整備されていった。真備は唐の弘文館の画像を日本にもたらし、百濟画師に写させて大学寮に置いたという。これが「唐本」と呼ばれて積奠画像の基本として尊ばれ、巨勢金岡の転写本が作られるなどした。こうした経緯から日本の積奠は唐のように彫像を置いたり壁面を描いたりするのではなく、聖賢の画幅を掛ける形で行われるようになった。『延喜式』（大学寮）では孔子像を廟堂奥に南面して置き、その東西に『論語』先進篇に見える十人の高弟、いわゆる十哲の画像を配列する形であつたようだ。その後、積奠は細々と続けられていたが、応仁の乱以降廃絶してしまつた。江戸時代初期、寛永九（一六三二）年、徳川義直が上野忍岡（現在のの上野公園の地）に先聖殿（孔子廟）を建て、林羅山に寄進した。翌十年、羅山によつて積奠は復興された。そのさい寛永九年、羅山は、積奠での使用や学生への教材も兼ねて、儒教の聖人・賢人二十一人の肖像画を制作することを企画し、狩野山雪に描くように依頼している。それが現存する『歴聖大儒像』二十一幅である。このうち本学に蔵する宋儒六幅は当時の積奠に使用されたもので、『昌平志』所載の「殿上列位図」によると、孔子を中心に左右に四配（顔子・曾子・子思・孟子）の彫像が南向きに並び、両廡（両脇の部屋）に六人の宋儒が従祀されていた。孔子と四配とは彫像が常置されていたので、積奠にあつたつてこの六幅の画像が掛けられたのである。これらの像は『礼記』王制にいう「昭穆」の制という祖先の位牌を並べる序列の法則によつて左右に振り分けて配列されている。つまり①周子③程叔子⑤邵子が「昭」、②程伯子④張子⑥朱子が「穆」である。十七世紀後半は幕府の文治政策とも相まって、平安時代の王朝漢文学の顕彰が行われた。なかでも中心になったのは林家の儒者たちであり、林鶯峰が王朝期を彷彿する弘文館学士を名乗つたことはその象徴的意味合いをもつ。これらの手になる『本朝一人一首』『史館茗話』などは、日本漢文学史研究の嚆矢としての位置をもつ。

（参考）小島憲之『国風暗黒時代の文学 上』塙書房一九六八

東野治之『正倉院文書と木簡の研究』塙書房一九七七

『太田昌一郎著作集 一 日本漢籍史を中心とする業績』吉川弘文館 一九九一

杉原たく哉『中華画像遊覧』大修館書店二〇〇〇

芳賀紀雄『萬葉集における中国文学の受容』塙書房 二〇〇三

長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』汲古書院 二〇〇六

金文京『漢文と東アジア―訓読の文化圏―』岩波書店 二〇一〇



第一ノ 聖賢のことば  
 子曰學而時習  
 子謂之為曰此レ  
 學ハ自虎通ニ覺

一 論語集解

論語子學第九  
 何晏集解 皇朝軍  
 子學言利與命與仁 義者希也利  
 命者天之命也仁者行也  
 義也利能及之故前言也 達志當  
 人曰大哉孔子博學而無所成名  
 此言之人莫九也博學道無不  
 一也 子聞之謂問本去曰吾何

二 論語集解

論語序  
 何晏集解 皇朝軍  
 子曰漢中壘校尉劉向言魯論語二十篇皆  
 孔子弟子記諸善言也太子太傅夏侯勝前  
 將軍蕭望之丞相韋賢及子玄成等傳之齊  
 論語二十二篇其二十篇中章句頗多於魯  
 論語王卿及膠東庸生昌邑中尉王吉皆  
 以教之故有魯論有齊論魯共王時嘗欲以

三 論語集註

也記善言也既學而又時之習之則成學  
 者熟而中心喜誌其進自不能已云  
 程子曰習重習也時時思擇決於中則  
 說也又曰學者當以行之也時習之則成  
 學者在利故說○謝氏曰時習者無時而  
 不習坐如尸坐時習也立如齊立時習也  
 有朋自遠方來不亦樂乎  
 朋同類也自遠方來則益者可知○程子  
 曰以善及人而後從者衆故可樂又曰說  
 在心樂主發故在外  
 人不知而不愠不亦君子乎  
 愠含怒也君子成德之名尹氏曰學在己  
 敏不在人何愠之有○程子曰雖樂於  
 人而不見是而無驕乃致謔君子思認及  
 人而樂者須而若不愠而不愠者進而難  
 故惟常德者能之然德之改以時亦曰學  
 之正習之熟純上深而不已焉耳○程子  
 曰樂由中而後得非樂不足以誨君子  
 ○有子曰其為人也孝弟而好犯上者鮮矣  
 不好犯上而好作亂者未之有也

四 論語

叔世也蓋唐本有古今之異字家本  
 有損益之失于年代遠不可據而  
 測遂撰累葉之本以付時庶幾博雅  
 君子糾焉  
 天文癸巳八月し亥  
 金堂光祿寺檢校通判臣劉星魯法崇元

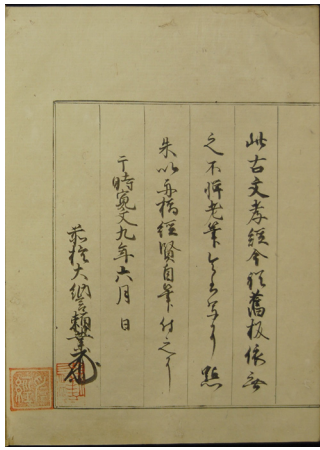
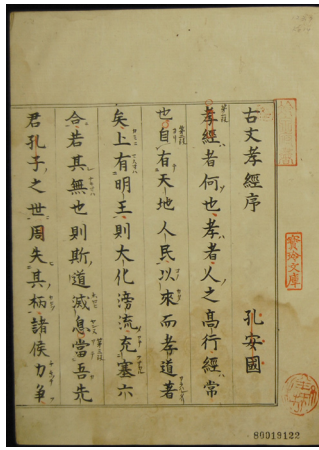
論語序  
 叙曰漢中壘校尉劉向言魯論語二  
 十篇皆孔子弟子記諸善言也太子  
 太傅夏侯勝前將軍蕭望之丞相韋  
 賢及子玄成等傳之齊論語二十二  
 篇其二十篇中章句頗多於魯論語  
 卿王卿及膠東庸生昌邑中尉王吉

五 論語

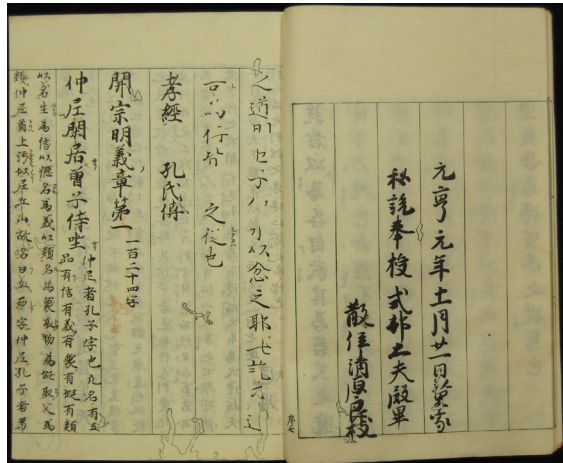
解中問為之訓解至于今多矣所見  
 不同互有得失今集諸家之善說記  
 其姓名有不安者願為改易名曰論  
 語集解光祿大夫關內侯臣孫光  
 祿大夫臣鄭冲散騎常侍中領軍安  
 鄉亭侯臣曹義侍中臣荀爽尚書駙  
 馬都尉關內侯臣何晏等上

論語卷一 學而第一 凡十六章  
 何晏集解  
 子曰學而時習之不亦說乎  
 有朋自遠方來不亦樂  
 乎子曰其為人也孝弟而好犯上者  
 鮮矣不好犯上而好作亂者未之有也  
 子曰其為人也孝弟而好犯上者鮮矣  
 不好犯上而好作亂者未之有也

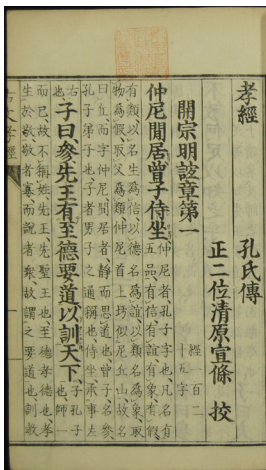
六 古文孝經



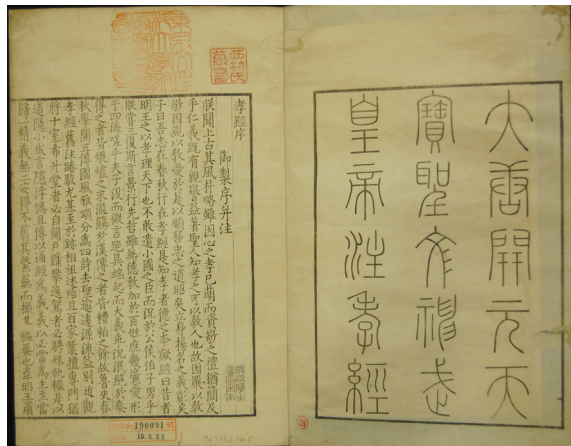
七 孝經



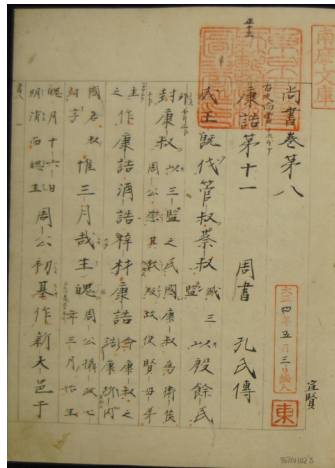
八 孝經



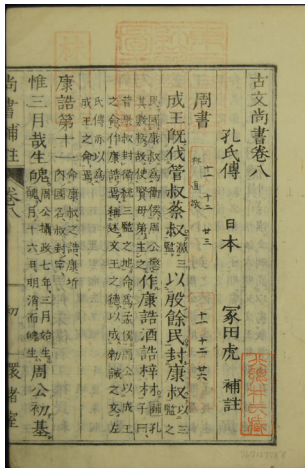
九 孝經



一〇 古文尚書



一一 古文尚書



一 論語集解(ろんごじつかい) 十卷五冊 (口 860-12)

室町時代中期写。題簽：魯論。内題：論語。 縦二八・一cm、横二一・八cm。袋綴。全丁匡郭に沿って本文を切り大半紙に貼り付けてある。印記：円融藏。盛胤之印。(二印とも梶井宮盛胤法親王)。北総林氏藏。浩卿。(二印とも林泰輔)。

『論語』は春秋時代末期(前五世紀)に成立したといわれる。孔子(前五五一〜前四七九年)とその門人および、門人たち同士の対話をまとめた書。漢代には『齊論』『古論』『魯論』の三種のテキストが存在したが、『魯論』が現在のテキストの祖と考えられている。本書の題簽に「魯論」とあるゆえんである。後漢の鄭玄(一二七〜二〇〇年)が注したが、唐末五代の間に滅び、残巻を見るのみとなっている。鄭玄より三國時代にかけて多くの注釈が書かれたが、ほとんど失われて見ることができない。ここに魏の何晏(？〜二四九年)の『論語集解』があらわれ、今日まで伝わっている。この書は鄭玄のテキストに基づき、鄭玄はじめその他の諸家の注を取捨選択して作ったもので、漢の学者では孔安国・包咸・周氏・馬融・鄭玄、魏の学者では陳群・王肅・周生烈の説が引用され、時に何晏の自説を加える。この書は今に完存する最古の『論語』注で、後世には古注として重んぜられ、今日の『論語』の祖本である。六朝時代の梁の皇侃(四八八〜五四五年)の『論語義疏』は、宋の邢昺(九三二〜一〇二〇年)の『論語正義』とともに『集解』にさらに注釈を加えたもので、日本においても大いに利用された。

本書は『論語集解』の日本での最古の版本である正平本の忠実な写本である。正平本『論語』とは、巻末に次の刊記を持つ本をいう。

堺浦道祐居士重ねて新たに工に命じて梓に鏤らしむ。

正平 五月吉日謹んで誌す。

学古神徳楷法日下逸人貫書す。

これによると正平十九(一三六四)年、堺の道祐居士が正平以前にすでに存した日下逸人貫が版下を書した版本を覆刻したものであろうことが分かる。正平本は毎篇首に篇内の章数を記すにあたり、必ずこれを「何晏集解」の下に置く。この書式の特徴は現存の古鈔本では関東清原家の祖、教隆写定に淵源する東洋文庫藏正和本、宮内庁書陵部藏曆底本などと等しく、内部徴証からも教隆写定本に拠っていることが明らかになった。中国においては、宋代に『論語正義』が出版されてからは、『論語集解』は単行せずに『正義』に組込まれるか、あるいは再び『正義』から抽出されたものが伝わっていたのである。その点、日本の古鈔本は唐代の鈔本の姿を伝えており貴重で

ある。清の錢曾『讀書敏求記』康熙五十三年(一七一四)年に高麗より「高麗鈔本何晏論語集解」を得たという。しかしこの本は錢曾が記す刊記によって正しく正平本の写しであることが分かる。彼はそのなかで「筆画奇古にして、六朝初唐人の隸書碑版に似たり」とこの本が古態を伝えていることに言及している。さらには清の黎庶昌の『古逸叢書』にも正平單跋本が収められている。本書はこの正平初刻本を覆刻したうえで、その跋文より最後の一行「学古神徳楷法日下逸人貫書」を削って刊行した、いわゆる單跋本を写したものである。ほぼ忠実な写本といえるが、序文の一行の字数、版心の形式は違っている。書写年代については室町時代中期とするが、近年の研究ではなお室町時代前期に遡る可能性もあるという。

なお本書には、今も東京国立博物館に残る正平無跋本の板木によって、明治になってから刷られた残板本(二冊、口 860-200)が存する。摩滅の激しい板木によって刷られたもので、諸橋轍次の跋文一丁を付す。

旧蔵者の林泰輔(一八五四〜一九二二年)は、明治時代の漢学者で、字は浩卿。号は進齋。千葉県の人。東京大学古典講習科漢書課を卒業し、東京帝国大学文学部助教授、東京高等師範学校教授。甲骨文字研究の開拓者として著名なほか、『論語』研究史を体系化した『論語年譜』および『附録』(初版一九一六年、12383-H48)二巻は、随所に彼の『論語』関係書蒐集の一端を示しており、ことに日本における『論語』史を具体的に眺め渡すことができる。また最晩年の成果として『論語源流』(自筆稿本二冊、口 860-136)がある。本書は中段に『論語』校訂本文を載せ、その上段に先秦の諸書に見える関連する孔子の言行を記し、また下段には『論語』との関連が明らかではないものの類似する言語表現を記載してある。本書蔵本を、すでに影印刊行された慶應義塾大学斯道文庫蔵本(阿部隆一解題、汲古書院、一九七一年)と比べてみると、両者同じ装丁ながら、後者において付箋などで挿入された部分に前者においては本行に書き込まれているので、本書蔵本を浄書本とすることができよう。彼の蔵書のうち四書を中心とした六九一部が没後、一九二二年十二月に嗣子林直敬によって、東京高等師範学校附属図書館に寄贈され「林文庫」として収蔵された。

(参考) 川瀬一馬「正平本論語攷」『日本書誌学之研究』講談社一九四三

武内義雄「正平版論語源流攷」『武内義雄全集二』角川書店一九七八

高木三男「林文庫」『筑波大学附属図書館報つくばね』8-2 一九八二

高木三男「正平版論語集解 残板本」『筑波大学附属図書館報つくばね』10-3 一九八五

町田三郎「林泰輔と日本漢学」『明治の漢学者たち』研文出版一九九八

高橋智「室町時代古鈔本『論語集解』の研究」汲古書院 二〇〇八

(谷口孝介)

二 論語集解(ろんごしつかい) 十卷二冊 (口860-16)

慶長年中(一五九六〜一六一五年)京都 要法寺刊。四周双辺。有界。各面七行、一七字。注文双行、縦二六・九cm、横一八・七cm。刊記:慈眼刊/正運刊/洛函要法寺内開板 上下巻末に「捐俸買來子孫讀之嚮及借人為不孝矣 藤原俊將(注一)」と墨書する。印記:坊城蔵書。藤氏。俊將。(三印とも坊城家)。荻香山房之印(木村素石)。南摩文庫(南摩綱紀(注二))など。

京都の日蓮宗の寺院、要法寺は慶長年間に『沙石集』『太平記』『文選』など和漢仏書に亘つての活版印刷を行なつたことで有名である。本書もそのひとつであるが、他と異なり整版本である点の特徴である。これに先行する活版本が存したかどうかは未詳である。この本も前述した『論語集解』と同じく、「何晏集解」の日本の古鈔本に拠つたものであるが、毎篇首の章数を記すにあつて、篇題の下、「何晏集解」の上に記す。この形態上の特徴は文永本・高山寺本などの中原家本系統に顕著に見えるもので、要法寺本の出自を示すものであろう。また日本の古鈔本の共通した特徴のひとつである述而篇の「君子亦党乎」の五文字の脱文が、この本では補われている。おそらく底本の段階で宋版本などによって補われたものと思われる。

なお本書には本書とほぼ同版と思われる、慶長年中の無刊記整版本を蔵している(二冊、口860-15)。

(注一) 上下巻末に署名する坊城俊將(一六九九〜一七四九年)は、勤修寺家から出た俊実を祖とし京都小川に住し、小川坊城と称した名家。俊將は好学の士で権大納言に任じられた。

(注二) 南摩綱紀(一八三三〜一九〇九年)は会津若松生まれ。昌平黌に学び、洋学をも修めた。東京高等師範学校教授。詩文に長じており、『内国史略』などの著作、教科書の編纂などにも力を尽くした。

(参考) 川瀬一馬『増補古活字版の研究』日本古書籍商協会 一九六七

(谷口孝介)

三 論語集註(ろんごしつちゅう) 零本(巻一)一冊 (口860-28)

元龜四(一五七三)年写。春永筆。各面一〇行、一七字。縦二八・六cm、横一九・三cm。袋綴。奥書:于時元龜四年(西)三月十三日書之春永筆/丁数廿七 新注論語全部一筆。印記:北総林氏蔵。浩卿。(二印とも林泰輔)。

南宋の朱熹(一一三〇〜一二〇〇年)の原著、『四書集註』(他の三書は『孟子集註』『大学章句』『中庸章句』)のひとつ。『論語集註』の完成は淳熙四(一一七七)年、朱子四十八歳のおりである。理学の完成者としての彼が、何晏『論語集解』に代表される、これまでの訓詁を中心とした古注に対して、哲学的体系を明示した清新な注であり、以降、新注として『論語』の注釈のひとつの標準となった。

本書は日本における江戸時代以前の『論語集註』の鈔本としては唯一の伝本である。同種の奥書を持つ僚巻として、渋沢栄一旧蔵の青淵論語文庫(東京都立中央図書館)に巻二と巻十とが存する。これらの奥書によると、春永なる人物が元龜四年三月より十月中旬まで数ヶ月を要して書写した十冊本であったことが分かる。他に伊地知季安『漢学紀源』に巻三の存在を記し、その奥書を記録しているが、所在は不明である。注を本文より一字下げた同じ大きさに書写し、全巻に朱墨による訓点・声点が付してある。たとえば冒頭部を本書の訓点通りに読み下してみると、「子ノノタマワク。学テ而シテ時ニ之ヲナラウ、亦ヨロコバシカラ不ランヤ」となる。この訓法は元和十(一六二四)年ころ刊行されたという「桂庵和尚家法倭点」(一冊、チ4155【参考一】)に見える、「而」字。(中略)又不<sub>レ</sub>涉<sub>レ</sub>句讀<sub>ニ</sub>処アリ。人不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>愠<sub>ニ</sub>類。新註<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>字、而<sub>レ</sub>毎<sub>レ</sub>字、如<sub>レ</sub>此<sub>ニ</sub>点。其<sub>レ</sub>故、古<sub>レ</sub>点<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>讀<sub>ニ</sub>ク故ナリ。学<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>時<sub>ニ</sub>習<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>。此<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>句、論語<sub>ニ</sub>首<sub>ニ</sub>篇<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>篇<sub>ニ</sub>首<sub>ニ</sub>五<sub>ニ</sub>字<sub>ニ</sub>皆<sub>ニ</sub>肝<sub>ニ</sub>要<sub>ニ</sub>字<sub>ニ</sub>也。争<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>讀<sub>ニ</sub>乎。古<sub>レ</sub>点<sub>ニ</sub>、マナンテ、トキニ、ナラフト、ハカリ読<sub>ニ</sub>テ、而<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>兩<sub>ニ</sub>字<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>讀<sub>ニ</sub>、曲<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>也」との訓法と符合する。『桂庵和尚家法倭点』は文字通り、五山の禅僧、桂庵玄樹(一四二七〜一五〇八年)が岐陽方秀の創始した新註本の施点を受けて、創案した新訓法を、末流の弟子、如竹(文之門人)がまとめて刊行したものという。この桂庵点と合致する本書は『論語集註』の最古の鈔本というばかりではなく、古代・中世の博士家の訓法から江戸時代の道春点にいたる、訓詁の歴史の画期に位置するきわめて貴重な資料であるといえよう。横並びに三つ打たれた濁点や独特の形の朱の声点にも注目したい。

旧蔵者、林泰輔は晩年、大正九(一九二〇)年によく本書を見出すことができた。ために、大正五年刊行の『論語年譜』には残念ながら触れられていない。

(参考) 林泰輔『元龜鈔本論語集註に就て』『支那上代の研究』進光社 一九二七

川瀬一馬『近世初期に於ける経書の訓点に就いて』『日本書誌学之研究』講談社 一九四三

(谷口孝介)

#### 四 論語(ろんご) 十卷二冊

(口 860-13)

天文二(一五三三)年跋刊 四周単辺。有界。各面七行、一行十四字。黒口単魚尾。縦二・八cm、横二〇・六cm。刷題箋…東京魯論 唐歐陽詢書。第一冊内題…論語学而第一 何晏集解。印記…林文庫。北総林氏蔵。浩卿(三印とも林泰輔)。秋月春風樓磯氏印(磯淳)。

本書はいわゆる天文二(一五三三)年跋刊の天文版『論語』の後印本。第二次世界大戦によって消失するまで、堺南宗寺に版木が存したことによって、南宗寺版とも言う。【一】で見た正平版と『論語』出版史において双璧をなすものである。本書の最大の特徴は、何晏論語序を冠し、さらに内題下に「何晏集解」とあるものの、注釈が除かれた単経本であることである。

天文版には卷末に「天文癸巳八月乙亥金紫光祿大夫拾遺清原朝臣宣賢法名宗尤」と署名する一丁分の跋文がある。堺の阿佐井野氏が清原家の家本によって刊行した旨が記されている。本書においてはこの跋文が巻頭に綴じられているが、本文より一字下げた体裁は跋文のものである。天文版は江戸期を通じてかなり刷られたようで、本書がいつごろ印刷されたのかは不詳だが、刷題箋に「唐歐陽詢書」とあるのは、南宗寺僧が寺宝目録によってした作為とのこと、幕末に近いころかと思われる。なお初版に近い早い時期の版本として、大英図書館蔵本、国立国会図書館蔵本、慶應義塾大学蔵本が知られている。

本書の旧蔵者磯淳(一八二七〜一八七六)は、明治九(一八七六)年福岡秋月の乱の首謀者のひとり、秋月藩校稽古館教授などを勤めた儒者であり、蔵書家としても知られる。

(参考) 細川潤次郎「天文板論語考」『南宗論語考異』南宗寺 一九一六

(谷口孝介)

#### 五 論語(ろんご) 十卷二冊

(口 860-26)

刊記…天明三(一七八三)年癸卯五月/大坂 大野木市兵衛/江戸 須原屋茂兵衛/京都 同店。四周単辺。有界。八行二十字、割注。単魚尾。頭書あり。縦二七・二cm、横一八・二cm。序、刷題箋、版心の書名…論語集解標記。封面…魁星

印および「佩蘭清先生聞龍溪巖垣先生標記/東崖伊藤先生考訂原本 論語集解/不許翻刻・千里必究 東都書林 千鐘堂蔵版(須原蔵)」。尾題「論語卷十終」の次行に「安永七年春三月/京都 巖垣長門介三善彦明 標記」とある。印記…林文庫。北総林氏蔵(二印とも林泰輔)。

本書は享保十七(一七三二)年同じ須原屋から伊藤東涯の考訂により出版された『論語集解』に、伏原宣條(注1)の門弟岩垣彦明(注2)が標記を加えて、天明三(一七八三)年五月に出版されたもの。巻頭に「大師明経儒 伏原宣條による「題論語集解標記首」(安永七(一七七八)年十一月)を冠し、享保版にあつた伊藤東涯による「論語集解序」が次ぐ。宣條標記首によると、彦明は梁皇侃義疏と宋邢昺正義との要を取り、集解に頭注・傍注を付したという。本書は享保版に基づき、頭注を入れ込み、さらに行間を拡げて細字で傍注を組み込んでいる。第二冊巻尾に「千鐘房鐫梓畧目録」が一丁分ある。

(注1) 伏原宣條(享保五(一七二〇)年〜寛政三(一七九二)年)、江戸時代中期の公卿、古注学者。大蔵卿伏原宣通の子。本姓は清原氏。寛保三(一七四三)年、明経博士。宝暦六(一七五六)年、従三位。安永六(一七七七)年、正二位にすむ。七十二歳。著作に『倭漢善行録』。(注2) 岩垣彦明(寛保元(一七四一)年〜文化五(一八〇八)年)、漢学者。彦明字は亮郷、一字孟厚、通称長門介、龍溪後に栗翁と号した。京都に生れ長じて博士清原家の学を受け、伏原宣條、皆川淇園の門に入り古学に通じた。従五位下大舍人権助に任ぜられた。年六十八。著書に『十八史略標註』七卷、『松蘿館詩文集』、『論語筆記』、『孟子筆記』などがある。

(谷口孝介)

#### 六 古文孝経(こぶんこうきょう) 一卷一冊

(1237-Ko14)

寛文九(一六六九)年写。葉室頼業(注1)筆。船橋経賢(注2)加點。各面六行、一三字。注文双行。縦三〇・二cm、横二二・五cm。袋綴。奥書…此古文孝経今猶旧板依無/之不憚考筆今書写了 点/朱以舟橋経賢自筆付之了/于時寛文九年六月 日/前大納言頼業(花押) 印記…冷泉府書(下冷泉家)。宝玲文庫(フランク・ホール)。為経(下冷泉為経(注3))。

孔子が曾子に説いた孝道が書かれている。曾子の門流の著。『論語』と並んで、儒教の基本図書として重視された。『孝経』に今文と古文とが存し、今文に鄭玄注、古文に孔安国伝が伝えられることは『尚書』と同じ。今文は十八章、古文は二十二章と章数に相違があるが、内容的には古文に闡明章が多いことを除いては、章の分段の差異であつて大差はないといえる。注釈については、六朝を通じて注の消長があり、こ

とに隋の開皇十四（五九四）年に孔安国伝が再発見され、劉炫によって校定されて地位を得たものの、当時の儒学者によって劉炫偽作説が唱えられた。しかし現在では『尚書』に同じく、魏晉の間の偽作であるとの考えが有力である。その後、唐の玄宗は今文によって注を制し、開元十（七二二）年始注、天宝五載（七四六年）重注と二度の御注が頒布され、それ以降孔鄭二注は勢いを失い唐末五代の間に忘佚していった。

日本においても中国の状況を継受して、『論語』とならび古代律令官人の必須の教科となっていた。貞観二（八六〇）年の詔によって平安時代一時御注本が朝廷の儀式において使用されたが、奈良時代に伝来していた『古文孝経』孔安国伝も平行して利用されており、それが明経道博士家清原、中原両家に伝承されて、『孝経』といえは孔伝本と盛行するにいたった。日本古代において『論語』何晏注や『孝経』孔安国伝など中国南北朝時代の南朝系の注釈が用いられているのは、百済経由で受容された南朝系の学問の影響によるという。なお後のことであるが、中国においてすでに佚していた孔伝本が日本にのみ伝わり、享保十七（一七三二）年に太宰春台が考訂刊行した孔伝本が逆に西伝し、清乾隆四十一（一七七六）年に鮑廷博の『知不足齋叢書』第一集に収められることとなる。

仁治二（一二四一）年の清原教隆校点本以下、清原・中原の両博士家の手によって数種の孔安国伝鈔本が伝わることとなる。清原家においても鎌倉の仁治本に対して、京都清原家の家本を移点した三千院本との間で本文上の対立が見られる。この対立のなかで本書の位置付けを試みると、大題を「古文孝経」とすること、今字で書すこと、応感章第十七の「必有長也」の四字が存すること、などによって、鎌倉系統の本文であることが分かる。しかし清原家の家本を忠実に写しているわけではなく、仁治本の孤立する箇所などは他本に従っており、中立的な本文となっている。これは恐らく奥書という書写者の依るべき本を作るといふ志向からきているのではないだろうか。

〔注1〕葉室頼業（一六一五～一六七五年）は、藤原勤修寺家流。権大納言に任ず。『源氏問書』、『葉室頼業記』を残す。

〔注2〕船橋経賢（一六四〇～一七〇八年）は、明経博士を世襲した清原氏の嫡流で、式部少輔に任ず。後水尾上皇の侍読をつとめる。

〔注3〕下冷泉為経（一六五四～一七二一年）は、葉室頼業の三男。下冷泉為元の養子となる。大納言に任ず。

（参考）坂本良太郎「我が国に於ける孝経古鈔本の系統」「文化」七一九 一九四〇  
林秀一『孝経学論集』明治書院 一九七六

東野治之『日本古代木簡の研究』塙書房 一九八三

（谷口孝介）

## 七 孝経（こうきょう）一冊

（口850-126）

文政六（一八二三）年跋刊版 四周単辺。有界六行。序・古文孝経。刷題簽・古文孝経孔氏伝 卷末に「文政癸未年冬十月阿正精識」と署す跋文がある。縦三〇・二cm、横二〇・五cm。印記・高木家蔵（高木利太）。鶴壽圍圖書之記 他三印あり

本書は跋文に記すように、福山藩主阿部正精が蔵していた、弘安二（一二七九）年の年紀をもつ古鈔本を摹刻刊行したものである。ただ原書の序は末尾二行分を残すのみだったようで、「元亨元（一二三二）年十一月二十一日累家／秘説奉授式部大夫殿畢／散位清原良枝」の奥書をもつ現宮内庁書陵部蔵本をもつて補刻している。送り仮名や朱によるヲコト点など訓点も写されており、虫損箇所も再現されている。ひじょうにていねいな翻刻で原書が存在が不明である現在、本書によって原書の面影を知ることができる。なお森鷗外『伊沢蘭軒』百五十二回から百五十四回に、蘭軒が主君阿部正精に代わって「刻弘安本孝経跋」を草した逸話が語られている。

本書の原書については『経籍訪古志』に簡要な解題が存するので、次に掲出しておく。なお引用は初稿本における海保漁村の添削による。

孝経孔氏伝一卷「弘安旧抄卷子本 福山城主蔵」

首存孔序二行、次孝経孔氏伝、次開宗明義章幾章第一、卷末空一行書孝経一卷、次空二行署弘安二年九月十三日書写之畢、有花押、每章下有経文字数、界長八寸一分至八寸三分、每行経十四字、注十八字至二十二字、文政癸未年福山侯覆刻以行于世、卷末有候手跋、云、此書梁末亡逸而顯於隋、故隋唐諸儒多疑此伝仮託。然隋代至盛唐此伝与鄭注并著令式、皇国先王亦著大宝学令。貞観中有詔立玄宗注、然此伝仍不為所廢。（下略）

（谷口孝介）

## 八 孝経（こうきょう）一冊

（口850-14）

刊記・弘化二（一八四五）年乙巳三月再刻。伏原家蔵。刷題箋・古文孝経 清家正本 再刻。四周双辺、有界。八行一八字、注文双行。白口単魚尾。訓点送仮名

付。天明辛丑(元、一七八一)年清原宣條序、弘化二年源松苗(岩垣東園)跋。  
縦二六・四cm、横二五・三cm。印記・林文庫。北総林氏蔵(二印とも林泰輔)。明経  
道儒。

本書は、天明元年に刊行された清原宣條校本の再刻本である。初版本には送仮名が  
なかつたが、弘化二年の清原宣明序に「加国訳以便童蒙誦讀。蓋以余家別有誦法也」  
とあるように、この再刻本には伏原家に伝わる博士家点により付訓がなされている。  
伏原は本姓清原で中世明経道博士家として栄えた家柄である。【六】に述べたように、  
清原家では『古文孝経』の本文・注釈・訓点が付授されており、近世にいたって『孝  
経』出版の一種のブランドとなった。近世に出版された多くの『孝経』のなかでその  
伝来において独自性を主張するものである。本書にも刊記に「伏原家蔵」と大きく印  
字されているにはその表れと言えよう。

(参考) 森川彰「孝経の和刻」水田紀久・頼惟勤編『中国文化叢書』9 日本漢学 大修館書店  
一九六八

林秀一「わが国における孝経の伝来―主として刊本時代について―」『高野山大学国語国文』3  
一九七六

長澤規矩也編『和刻本経書集成 第六輯』汲古書院 一九七六

(谷口孝介)

## 九 孝経(じうきよう) 一冊

(口 850-121)

文政九(一八二六)年跋 湯島一江戸一 求古楼刊版 刷題簽・御注孝経 封面・大唐  
開元天宝聖文神武皇帝注孝経。(篆書) 左右双辺、有界、白口無魚尾。 每半葉一五  
行每行不定字数。 縦二八・八cm、横一九・六cm。 印記・西村氏蔵書。

本書は【六】で述べた天宝五載(七四六年)重注の御注孝経北宋版本を、文政九年  
に狩谷望之(椈斎)が摹刻刊行したものの。巻尾七丁表には望之による同じ重注本の石  
台本との「校讞」が四行分あり、それに次いで『孝経』の中日にわたる伝来から説き  
起し原書を摹刻刊行する意義をいう長大な跋が載る。本書の原書孤本である北宋版  
本は宮内庁書陵部現蔵にかかり、一〇二三年から一〇三三年の間の刊本【参考二】  
口 850-36)で、もと望之の求古楼に蔵されていた。本書の摹刻について、長澤規矩  
也氏は「望之ノ摹刻本ヨク宋本ノ面目ヲ存スト雖モ、之ヲ原本ト対校スレバ、少差アリ、  
例ヘバ、開卷第一行ノ孝ノ字ノ上方、経ノ字ノ扁下部、第二行御ノ字ノ扁ノ第一・

第二画ノ長短ノ如シ」と言い、ほぼ原書の面影を伝える優れた翻刻本である。

本書の原書についても『経籍訪古志』に簡要な解題があるので左に引いておく。  
又(御注孝経)「北宋槧本 求古楼蔵」

首行題孝経序、次行上空四字、題御製序並注、序後上空四字、題開宗明義章第一、  
卷末間一行題御注孝経一卷、後間一行載孝経音略、每半板十五行、每行字数不定、  
界長六寸九分、幅五寸、左右双辺、文政九年狩谷望之翻雕以行于世、望之跋曰、是  
本敬匡胤恒竟炫通七字闕筆、按、敬宋翼祖諱、匡胤太祖諱、恒真宗諱、竟翼祖嫌名、  
炫太祖嫌名(双行注略)、通、係章献明肃太后家諱(双行注略)、可証是本為天聖明  
道間刻本、更不疑也、卷首有脩竹陰印。

(参考) 日本書誌学会編『北宋刊本御注孝経』日本書誌学会 一九三二  
長澤規矩也「宮内省図書寮尊蔵北宋刊本御注孝経解説」同右書付録

(谷口孝介)

## 一〇 古文尚書(こぶんしょうしょ) 零本(存卷八) 一冊(口 815-1)

永正十一(一五二四)年写。清原宣賢(注)筆。 各面有界七行、一四字。注文双行。  
縦二七・四cm、横二二・四cm。袋綴。全体に朱墨による訓点と墨による校合書入れがあ  
る。 奥書・永正十一年四月二日以唐本書写之即加朱墨訖少納言清原朝臣(花押)

印記・東(清原宣賢)。南摩文庫(南摩綱紀)。 同筆の僚卷である巻七・巻十が京都  
大学附属図書館清原文庫に蔵されている。

『古文尚書』は四十六卷。『尚書』の尚は上の意で、上代の堯・舜から夏・殷・周の  
三代にわたる伝承的な歴史を書いた書物。『書経』ともいう。秦の焚書にあつていつ  
たん衰微したが、前漢にいたり当時通行の字体である隸書で書かれたいわゆる「今文  
尚書」が行われていたが、景帝のとき、魯の恭王が孔子の旧宅を壊したさいに、古い  
字体の科斗文字(おたまじゃくしに似た文字)で書かれた『尚書』が出てきた。これ  
を孔子の子孫の孔安国が解説して注を書いたといわれるが、今伝わるのは晉代の偽作  
とされる部分を含む。注釈は『今文尚書』に付けられた後漢の鄭玄の注があつたが、  
その呪術的な経書解釈が魏晉の頃には忌避されて、新出の『古文尚書』に付された孔  
安国伝が用いられるようになった。

日本においてもこの傾向は継受されて、「学令」の規定にかかわらず孔安国伝およ

び唐の孔穎達『尚書正義』が利用された。したがって日本に残る古鈔本は例外なく『古文尚書』孔安国伝なのである。これにより中国においては孔安国伝が『尚書正義』に組み込まれてからは、古態の伝承が絶えてしまったのに対して、日本の古鈔本は孔安国伝の古態をよく残しているといえる。また中原家、清原家に伝承されてきた古鈔本には、「才ナ」(摺有)、「才无」(摺無)、「才乍」(摺作)、「本ナ」(本有)、「本无」(本無)、「本作」(本作)などの傍記注が数多く存する。「摺」とは宋版本をいい、「本」とは博士家の証本をいうようである。本書においても篇目「康誥第十一」の上に補入記号を付して、「古文尚書 才无本ナ」と記す。このことは本書が基づいた本が版本に近似しており、証本とは対立していることを示している。また篇目の上に記された「正十三」は『尚書正義』の巻致をいう。総じて本書は天理図書館蔵の鎌倉時代末期鈔本と近い性格の本文を持つており、別系統の鈔本ということになる。また本書の経文と注文とは古注に基づく訓点が付されている。これは孔安国伝の釈義を基本とするが、孔伝に訓点が表示されていない文字に対しては、孔穎達『尚書正義』に示されている訓点を利用して解釈することもある。ただし『尚書』に関しては新注系の解釈は見あたらず、もっぱら古注によっていたことが窺える。

(注1) 筆者の清原宣賢(一四七五—一五五〇年)は戦国時代の明法道の学者。吉田兼俱の三男で、清原宗賢の養子となる。朱子学を積極的に取り入れ、新注による家学の発展に尽くし、その講義録は抄物として残されている。『日本書紀神代巻抄』や『伊勢物語』の注釈など和学にも造詣が深かった。

(参考) 武内義雄「隸古定尚魯に就いて」『武内義雄全集 三』角川書店 一九七九  
吉川幸次郎「尚書孔氏伝解題」『吉川幸次郎全集 七』筑摩書房 一九六八  
水上雅晴「清原宣賢の経学—古注の護持と新注の受容—」『琉球大学教育学部紀要』七六  
二〇一〇

(谷口孝介)

## 一 一 古文尚書 (いぶんしょうしょ) 十三巻七冊 (口 815-46)

刊記：寛政十三(一八〇一)年辛酉孟春／皇都書林 田中市兵衛／今村八兵衛／風月庄左衛門 発行 刷題簽：補註尚書。序題：孔伝古文尚書補註。巻題：尚書。版心の書名：尚書補註。封面：冢田多門述／補註尚書／風月堂／郁文館／博文堂 発行。第一冊巻頭に「孔伝古文尚書補註序」(寛政戊午(十、一七九八)歳秋八月二十五日冢田虎謹序)。第七冊巻末に「雄風館著書目録 大峯 冢田氏塾」。四周双辺、有

界。九行二〇字、注文双行。白口単魚尾。版心下に「環堵室」とあり。訓点送仮名付批点・批語あり。第二冊まで詳細な墨書書き入れあり。縦二五・〇cm、横一七・六cm。印記：北総林氏蔵。林文庫(二印とも林泰輔)。字元約 ほか二印。本書は江戸時代後期の儒者冢田大峯(一七四五—一八三二年)が『古文尚書』孔安国伝に付訓したうえ補註を付したものである。大峯の補註はその序にも言うように、諸説を勘案したうえで簡潔に経意を述べるものであって、考証の過程は記述されない。また経文の理解のために孔子の言行録である、『孔子家語』や『孔叢子』を引証するのも特徴のひとつと言えよう。彼には別に『家註孔子家語』十巻や『家註孔叢子』十巻があり、これらの書を重要視していたことが知られる。

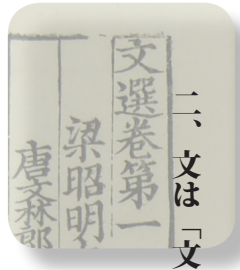
著者大峯、名は虎、字は叔猷、通称は多門。信濃の出身。初め父に学んで程朱の学を修めるが、後自ら古今の書を研究し、経に拠つて経を解する学的態度を確立し、諸経の解を述作する。寛政異学の禁の令のおり、その不可なることを上書した。後、尾張藩明倫堂督学に任じられる。年八十八。家塾雄風館から多くの著作が出版される。『論語群疑考』十巻、『家註六記』六巻、『孟子斷』二巻、『荀子斷』四巻、『聖道合語』二巻、『聖道辨物』二巻などがある。

(谷口孝介)

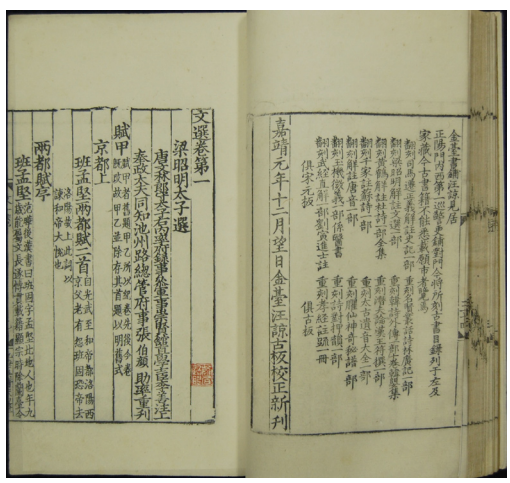
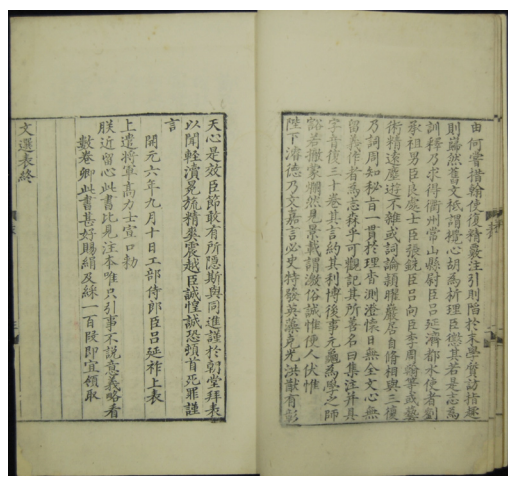




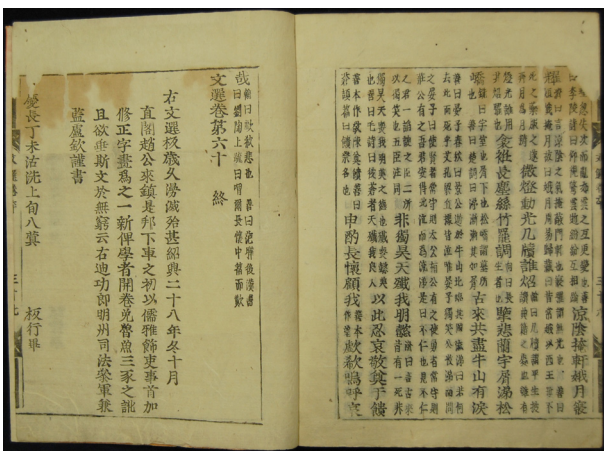
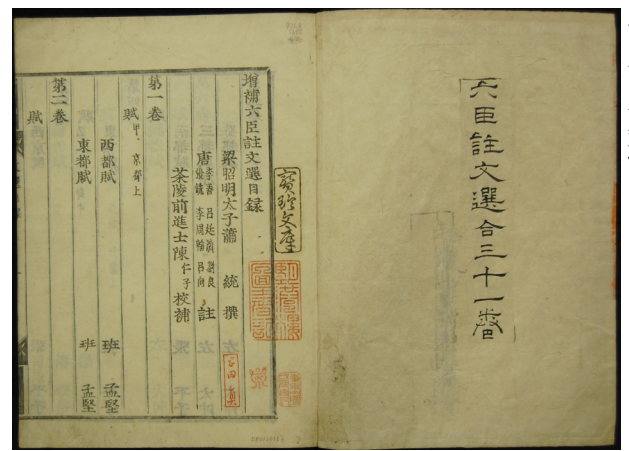
二、文は「文集」、「文選」



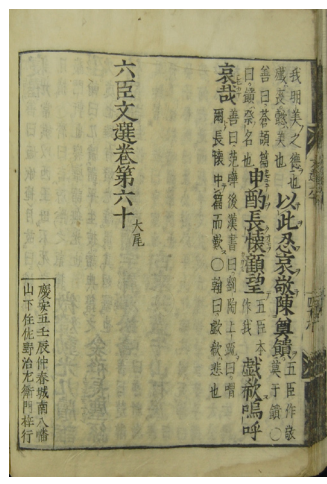
一二 文選



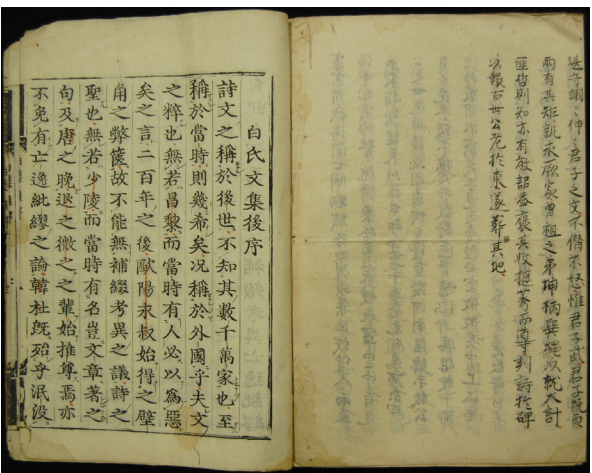
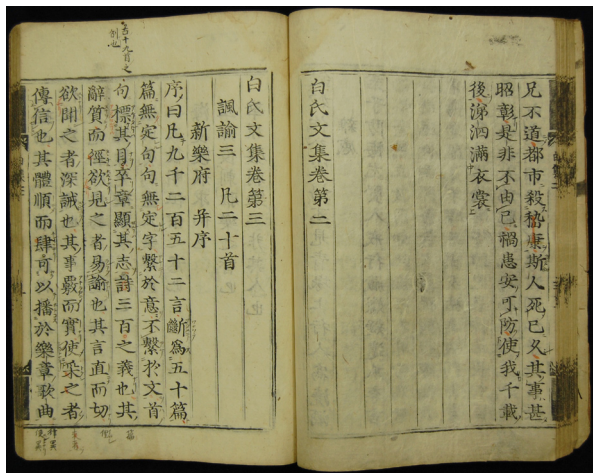
一三 文選



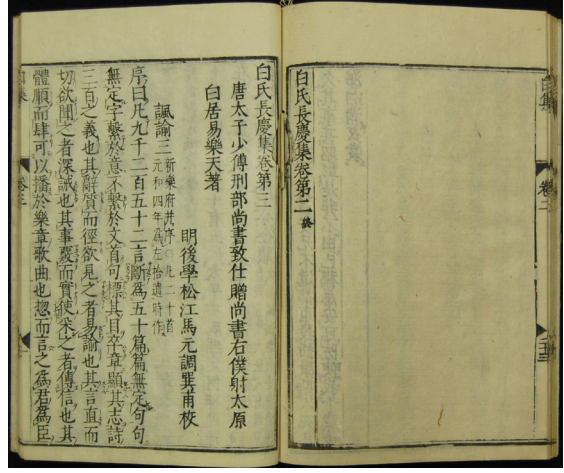
一四 六臣註文選



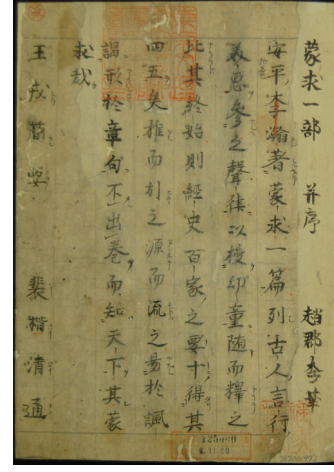
一五 白氏文集



一六 白氏文集



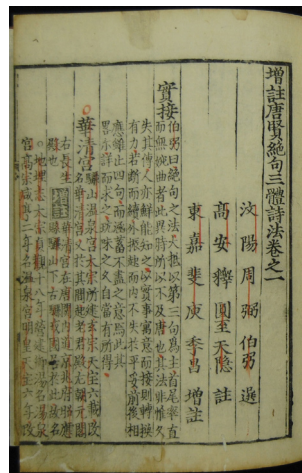
一七 蒙求



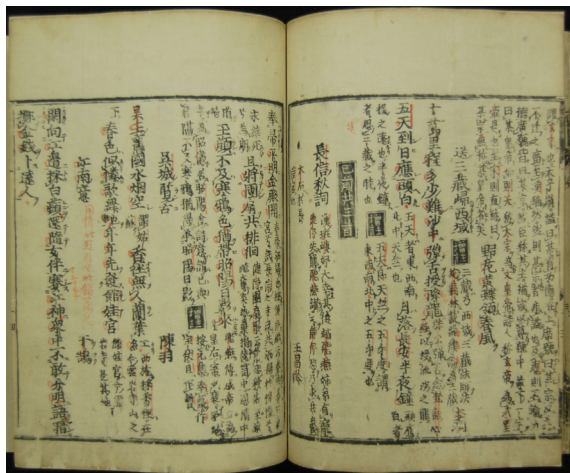
一八 新刻蒙求



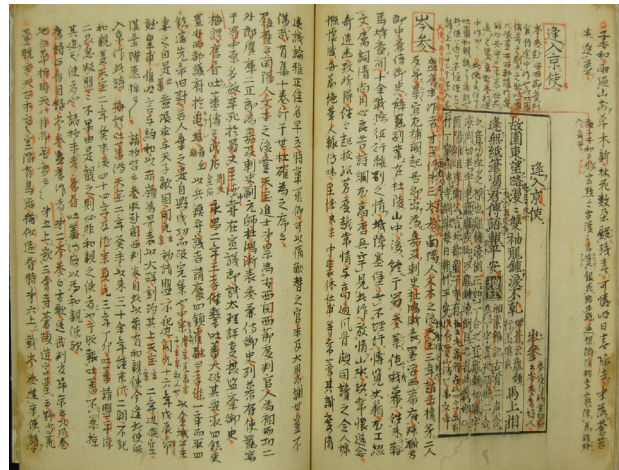
一九 增註唐賢三體詩法



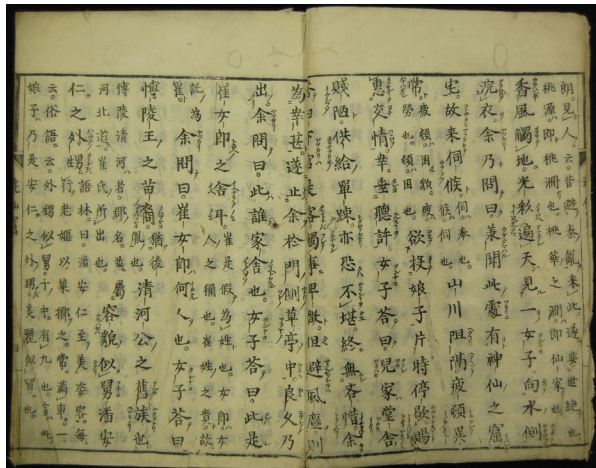
二〇 增註唐賢三體詩法



二一 增註唐賢三體詩法



二二 遊仙窟

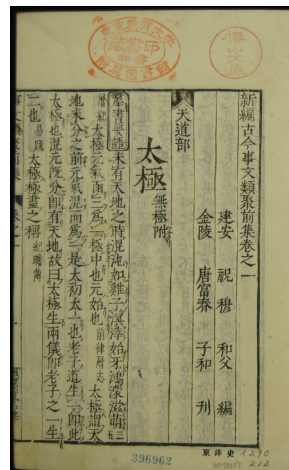
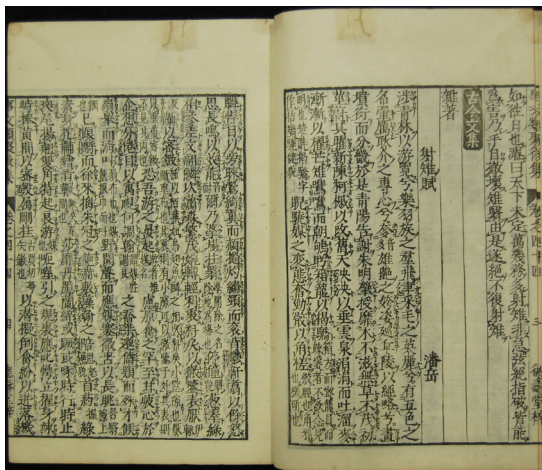


二三 遊仙窟鈔





二四 和漢朗詠集



二五 新編古今事文類聚

# 一一一 文選（もんぜん） 六十巻二十冊

（ル 320-494）

嘉靖元（一五二二）年 金台 汪諒刊

藍色表紙 縦三〇・二cm、横一九・五cm 線装

四周単辺等 匡廓内縦二〇・二cm、横一三・二cm 白口 双黒魚尾  
有界 每半葉一〇行、行二二字、注文双行

李善注。元の張伯顔本を、明の嘉靖元年に汪諒が覆刻したもの。

六世紀半ばに梁の蕭統が撰した『文選』（三十巻）は、周から梁まで約千年にわたる長い時間に制作された作品の中から秀作をよりすぐった選集で、目次によると三十七の文体（賦・詩・騷・七・詔・冊・令・教・策・文・表・上書・啓・彈事・檄・奏記・書・檄・對問・設論・辭・序・頌・贊・符命・史論・史述・贊・論・連珠・箴・銘・誄・哀・碑文・墓誌・行狀・弔文・祭文）に類別している。作品の選択基準は、蕭統の「文選序」によれば深い内容を有する美文（「事は沈思より出で、義は翰藻に帰す」）であった。唐代になると、七世紀半ばに李善が『文選』に詳細な注釈を施して六十巻にした。「書籟」（本箱）とあだ名された李善がつけた注の最大の特徴は、作品の言語表現の典拠と用例を挙げることにつとめ、私意による解釈を行わないというものであった。典拠との往還運動によつて豊かな表現となり得ている『文選』所収作品の要所を突く注釈方法であり、ひいては日本の古典注釈の方法にも影響を与えることになる優れたものであった。『文選』がいつ日本に渡来したかは定かではないが、奈良朝以降おもに律令官人を中心に享受され、登科のために李善の注とともに読まれたことは、平城宮出土の木簡や正倉院文書によつて明らかになっている。平安朝に入つて『文選』が更に流行したことは、『枕草子』に「文は文集、文選」と『白氏文集』と並んで称揚されたことから端的にわかる。『本朝文粹』は部立てにおいて『文選』に倣つたとされるし、『菅家文章』や『江吏部集』には、竟宴で詠まれた、『文選』に關わりのある詩文も収められている。また、訓読の方法で、一つの語をまず音読してから訓を重ねる読み方（「窈窕」を「エウテウトユホビカナル」と読む類）が古代より存在した。この訓法は『文選』独自のものではないが、これを「文選読み」というのはおそらくは明治期よりの呼称であり、『文選』に特徴的な難解な語を平易に解釈しようとした結果であるからという。

本書は、首に「文選序／梁昭明太子」蕭統、五〇一〜五三一「撰」、頭慶三二唐・高宗、六五八一年九月十七日「唐李崇賢「李善」上文選注表」、開元六一唐・玄宗、七二八一年九月十日「呂延祚進五臣集注文選表」及び「上遣將軍高力士宣口勅」を冠し、「文選目録」のあと、半葉（首巻三十四丁裏）を使つて書鋪の広告と刊記がある。広告は

八行分を無界として小字で十一行、書名目録の部分は二段組みになっていて、上段には「宋元板」として「翻刻梁昭明解注文選一部」など七部、下段には「古板」として「重刻韓詩外伝二十巻韓嬰集」など七部が記されている。刊記部分は有界で「嘉靖元一明・世宗、一五三二年十二月望日十五日」金台「北京の地名」汪諒一人名、本屋「古板校正新刊」とあり、最後の一行はあいている。巻一巻頭は、第一行「文選巻第一」、第二行「梁昭明太子選」、第三行「唐文林郎守太子右内率府録事參軍崇賢館直學士臣李善注上」、第四行「奉政大夫同知池州路一安徽省一總管府事張伯顔二元の延祐七年（一三二〇）、池州路の長官一助率重刊」となっている。巻一の一丁版心題は、中縫に「文一卷」、「乙」と丁づけがしてある。下象鼻に「九華吳清氏刀筆」と刻工名がある。版心は丁によつてバリエーションがあり、上象鼻に「六九上」、中縫は「十」のみで版心題がなく下象鼻に「張英」と刻工名があるものや、中縫に「文一」、下魚尾が上魚尾と同じ方向を向いていて下象鼻に「十三」（共に巻一）など。巻六十尾題「文選巻第六十終」、第九行に「監造路吏劉晉英 郡人葉誠」とある。

元・亨利・貞の四帙に納められ、第一帙の外側左上に「文選李善註一黒一 元一赤一」の貼題箋があり、内側に「文選李善註 四帙二十本／明嘉靖 汪諒覆元 張伯顔刊本／補冊 四冊 胡克家本」と紙片が貼られている。胡克家本「嘉慶十四（清・仁宗、一八〇九）年」で補っているのは、第三冊（巻五〜七）・第四冊（巻八〜十）・第十二冊（巻三十二〜三十四）・第十八冊（巻五十一〜五十四）である。第一冊は、藍色前表紙（裏打ち紙に反古を用いている。外題なし）、遊び紙三枚、茶色表紙（右側に篆書で「文選李善注」、本文、遊び紙二枚、藍色後表紙を、四針眼訂法で綴じる。陰刻で「莫印與儔」、「天然愛好」、陽刻で「漱雪祕玩」、「世察」等の印記あり。

明の洪武年間（一三六八〜一三九八）に書籍税が免除されると、全国各地、民間で大量の書籍が印刷されるようになった。永樂十九（一四二一）年の遷都によつて政治・文化の中心となった北京では書物の需要が飛躍的に伸び、覆刻・翻刻で知られた汪諒の店のように、版木に起こして発行する地元の本屋も活躍した。

- （参考）向島成美『李善論』『文芸言語研究 文芸篇』20 一九九一
- 富永一登『文選李善注の研究』研文出版 一九九九
- 清水凱夫『新文選学』研文出版 一九九九
- 興膳宏『中国文学理論の展開』清文堂出版 二〇〇八
- 羅樹宝『中国古代圖書印刷史』岳麓書社 二〇〇八
- 斯道文庫『図説書誌学 古典籍を学ぶ』勉誠出版 二〇一〇
- 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会 一九六三
- 東野治之『正倉院文書と木簡の研究』塙書房 一九七七

（稀代麻也子）

一三 文選(もんぜん)六十卷三十一冊

(921.4Sh95)

寛永二(一六二五)年 摺直江氏古活字版重刊

丹色表紙 縦二九・五cm、横二・六cm 線装

四周単辺 匡廓内縦二三・二cm、横一六・八cm

無界 每半葉一〇行、行二二字、注文双行

五臣・李善の順に注を並べた所謂六家注。古活字本の直江版を寛永二年重刊したもので、目録のみ贛州本系統の陳仁子の茶陵本によつて、正文と注は明州本によつてゐる。

本書は、表紙左上に「文選目録」と楷書で直書きした冊に目録のみを綴じ、「文選」と篆書で直書きされた本文の第一冊に序録と巻一、二を収める。

「文選目録」は、見返し中央に「六臣註文選合三十一卷」とあり、目録(有界)巻頭は、第一行「増補六臣註文選目録」、第二行「梁昭明太子蕭統撰」、第三行は( )内が小字双行で「唐(李善 呂延濟 劉良/張銑 李周翰 呂向)註」、第四行「茶陵前進士陳仁子校補」とあり、第五行から目次が始まる。目次の内匡廓は縦二三・五cm、横一六・九五cmで、匡廓四隅の切れ目が本文巻頭よりはつきりしている。

第一冊は見返し白紙、「李善上文選注表」、呂延済の「進集注文選表 五臣」と玄宗皇帝の口勅の順に並び(三丁表の第五行以下は空白)、四丁から蕭統の「文選序」が五臣の注附きで置かれ(八丁表の第六行以下は空白)、九丁から本文。「李善上文選注表」の末尾二行、「低一格」顕慶三年九月十七日文林郎守太子右内率府録事/「低一格」參軍崇賢館直學士臣李善上表」には一度胡粉で塗沫された形跡があり、前の行の「謹言」で終わり、以下空白となつてゐる筈の部分に手書きで「顕慶三年九月」、次行頭に「日」と書き込みがされている。巻一卷頭は、第一行「文選卷第一」、第二行「梁昭明太子撰」、第三行「五臣并李善注」とあるが、この三行も一度胡粉で塗沫されたあと胡粉が落剥して文字が薄く白みがかつてゐる。内題のすぐ脇に、小字で「梁昭明太子撰」とあり、少しあけて「文林郎」で始まり、「臣李善注上」で終わる手書きの一行があるが、これは第二行の文字に一部重なる形で記されていて、李善の肩書きの一部が判読できない。印刷された三行を一度胡粉で消した後に小字双行で李善の名(肩書きから)を手書きしている。朱・青・茶・紫・墨による批点・批語があり、足利本を参照しているものもある。巻六・九・十一には緑、青の不審紙がある。四針眼訂法で綴じられた生の柿の皮のような色の表紙には格子状の模様が空押しされているが、手

垢で黒光りしている目録と第一冊ではほとんど確認できない。下小口に背側から「文選六臣」と書かれ、巻数も丁寧(「五十九」など数字は縦に書かれて小口におさまつて)記される。巻六十尾題の後に一行あけて「低一格」右文選板歳久漫滅殆甚紹興二十八(南宋・高宗、一一五八)年冬十月/「低一格」直「秘」閣趙公「趙善繼」來鎮是邦下車之初以儒雅飾吏事首加/「低一格」修正字画為之一新俾學者開卷免魯魚三家之訛/「低一格」且欲垂斯文於無窮云右迪功郎明州「浙江省寧波」司法參軍兼/「低一格」監盧欽謹書」と、明州本からの転載がある。一行あけて表丁最終行に「慶長丁未(十二年、一六〇七) 沽洗三月一上旬八日空四格一板行畢」と直江版の刊記、裏に「寛永乙丑(一六二五年)孟夏四月一上旬日「空四格」一板行畢」と刊記がある。印記は陽刻で「岡田真」、「宝玲文庫」(フランク・ホルレー)、「東里市陽氏蔵書記」、「望港樓圖書記」など。少虫損、巻五十九・六十に汚損、一部補修あり。

外側のみ赤茶色に塗られた木箱入り。箱の本体は、奥三三・八cm、幅二四・一cm、高六七・〇cm。縦三段に仕切られ、前面に把手つきの蓋がある。蓋は厚さ一cmほどの板で、幅二一・八cm、高六三・三cm、これに六角(長径二・五cm、短径二・二cm)の把手が二・五cm程度出ている。板を箱の本体の上下にある溝に嵌めこんで蓋とする。蓋の裏に、表面の塗装と似た色で「五老松下生」、本体下部(外側だが、底の板は塗装されていない)の蓋側から黒で「安永四乙未、一七七五年/未十二月日/作者大工幸七」、少しあけて左半分に「書物たんす式ツ之内/大田南町/恒松和基」と書かれている。

文禄年間(一五九二)一五九六)に活字印刷が導入されてより、慶長年間(一五九六)一六一五)から寛永年間(一六二四)一六四四)までの約半世紀は、非常に価値が高いとされる古活字版の時代であった。それ以前の刊本はほぼ整版、それ以後は商業出版としての整版が広まり、活字はおされた。慶安年間(一六四八)一六五二)頃までのものは便宜的に古活字版と称されるが、以後は近世木活字本と呼ばれる。なお、上杉景勝の家臣であった直江兼統(一五六〇)一六一九)は、京都で様々な古活字版を出していた要法寺に委嘱して、慶長十二(一六〇七)年に『文選』を出版した。これを直江版文選という。

(参考) 斯波六郎『文選諸本の研究』京都大学人文科学研究所 一九五七

『長澤規矩也著作集』汲古書院 一九八二)一九八九

神應徳治「茶陵陳仁子刊『増補六臣注文選』の宋版本について」『けんぶん』6 一九八七

金学主「韓国古活字本『文選』の研究」『武庫川国文』41 一九九三

傳剛『文選版本研究』北京大学出版社 二〇〇〇

小秋元段『太平記と古活字版の時代』新典社 二〇〇六

(稀代麻也子)

#### 一四 六臣註文選(りくしんちゅうもんぜん) 六十巻六十一冊

(ル 320.21)

慶安五(一六五二)年 佐野治左衛門刊  
淡茶色表紙 縦二七・二cm、横一九・一cm 線装  
四周単辺 匡廓内縦二一・五cm、横一六・五cm 小黒口 双花口魚尾  
無界 每半葉九行、行一八字、注文双行

六臣注。明の呉勉学重校本をもとに、慶安五年、訓点をつけて翻刻。

漢籍を日本で刊行した和刻本は、日本人のよんだ漢籍を知るために忘れてはならない資料の一つである。慶安五年刊の和刻本『六臣註文選』の正文に加えられている訓点は、菅原家点を採り入れ大江家点も参照したものとされる。日本「文選学」が脈々と受け継がれて江戸時代の訓点に反映されたことになる。江戸時代に最も広く読まれた寛文二(一六六二)年版は、慶安五年版の後刷りとされる。慶安五年版は昭和になつてから影印刊行された。

本書は、首に「文選序」が五臣の注と共に置かれ、呂延祚の「進五臣集註文選表」が、丁付けを改めて一丁表から始まる。玄宗皇帝の口勅が三丁表二行で終わり、丁を改め四丁表から「李善上文選註表」、丁付けを改めて目録。目録巻頭は、第一行「六臣註文選目録」、第二行「梁昭明太子蕭統撰」、第三行は( )内が小字双行で「唐(李善 呂延濟 劉良/張銑 李周翰 呂向)註」、第四行「明 新安呉勉学 重校」。目録の後に丁付けを改めて「文選姓氏」。巻一卷頭は、第一行「六臣註文選卷第一」、第二行「梁昭明太子蕭統撰」、第三行( )内が小字双行で「唐(李善 呂延濟 劉良/張銑 李周翰 呂向)註」。外題は左上に貼られ、第一冊は、子持ち杵の題箋に黒で「文選 六臣註 一一五」、「一一五」を一本線で消し右に「一」と訂正。他の冊の題箋は訂正してあつたりなかつたりする。巻六十は尾題「六臣文選卷第六十」の右下に小字で「大尾」と添える。木記は左辺下辺が匡廓に重なり、「慶安五壬辰一六五二年一仲春二月」城南八幡/山下住佐野治左衛門梓行」。

胡粉による修正、朱・墨等による批点・批語あり。首冊の背に「共六十一」とあるほか、下小口に書名等が書かれるが、冊によって文体名まで書かれていたり、「七命」という作品から始まる巻には「命」と書かれていたり、二冊を重ねてまとめて書かれていたり、統一されていない。五針眼訂法で綴じられる。七帙に納められる。虫損あり。首冊と第二十九・三十・三十三・三十四冊に遊び紙一枚。印記は陽刻で「慎齋」「渡茅蔵書」など。

六臣注本は、『文選』正文の後に李善・五臣の順に注を並べたもの。贛州本、建州本、茶陵本(直江版は目録のみ依拠)、呉勉学本(慶安本が依拠)などが六臣注本である。六家注本は、五臣・李善の順に注を並べたもの。李善・呂延濟・劉良・張銑・李周翰・呂向の注を録する点ではこれも六臣注本だが、李善・五臣本と区別する場合にこの名称を用いることがある。秀州本、明州本(直江版が依拠)、広都裴氏本(「六家」の名称の由来)、袁本などが六家注本である。韓国の奎章閣も朝鮮活字の六家注本を蔵する。国宝の足利学校蔵明州本には補刻状況を説明した盧欽の刊語がなく、この刊語を転載する直江版、寛永二年本が依拠した明州本は、足利本より後の補刻本だったことがわかる。足利学校蔵明州本は、足利学校の第七代庠主(校長)であつた上杉九華の講義の御札に、北条氏康・氏政父子が当時金沢文庫にあつた『文選』を贈つたもの。第九代庠主の閑室元倍(三要、一五四八〜一六一二)によって書き入れられた訓点が残存する。金沢文庫も足利学校も武士階級が経営していた学塾であり、中世日本において『文選』が熱心に読まれていたことがよくわかる。

また、『文選集注』のような、李善・五臣以外の注を含む鈔本の貴重な残巻で日本のみ伝存の資料があつたという事実も、それぞれの所蔵者によって大切に保存されていた形跡があることとともに、日本人が『文選』を愛し続けたことを側面から証している。

(参考) 長澤規矩也編『和刻本文選 一〜三』汲古書院 一九七四

森野繁夫「文選李善注について」『日本中国学会報』31 一九七九

Knechtges, David R. "Wen xuan." Princeton University 一九八一

岡村繁『文選の研究』岩波書店 一九九九

芳村弘道『唐代の詩人と文献研究』中国芸文研究会 二〇〇七

中野三敏『江戸の板本』岩波書店 二〇一〇

(稀代麻也子)

#### 一五 白氏文集(はくしぶんしゅう) 七十一巻十四冊 (ル 335.90)

元和四(一六一八)年 那波道円刊。有界、黒双魚尾、四周双辺、各面九行、十六字。墨訓返点。朱引。縦二九・三cm 横二〇・三cm。木活字版。内題・尾題に「白氏文集、巻第一(〜七十一)」。本学蔵書は十四冊であるが、元は十五冊であつたと思われる。元来の六冊目にあたる巻二十四から巻二十七(碑碣・墓誌銘・記序・書)は欠落して

いる。

序は元稹「白氏長慶集」、跋は陶穀述「龍門重修白樂天影堂記(広順三(九五三)年)」、那波道円「白氏文集後序(元和四(二六一八)年)」。また、手写による別紙で李商隱「唐刑部尚書致任贈尚書右僕射太原白公墓碑銘」が挿入されている。

『白氏文集』は中唐の白居易(字は樂天。七七二年〜八四六年)の詩文集。

『白氏文集』が成立するまでには以下の様な変遷があった。初めは元和十(八一五)年江州に左遷された際に制作された「与元九書 1486」(作品番号は花房英樹氏による)に「凡そ十五巻と爲し、約八百首」とある様に十五巻に編成された。そのおりに「諷諭詩」・「閑適詩」・「感傷詩」・「雜律詩」の四分類がなされた(注1)。その後、長慶四(八二四)年に元稹によって『白氏長慶集』五十巻が編纂された。後の編纂過程は、白居易自身が制作した「白氏集後記 3637」に「白氏前に長慶集五十巻を著せり、元微氏序を爲る。後集二十巻は、自ら序を爲る。今又統後集五巻、自ら記を爲る」とあり、七十五巻本が最終形態であった。

彼の死後、宋代以降、詩を先に置き文を後に置くという「先詩後筆本」が主流となった。この系統には南宋の紹興初(一一三二)年に刊行された「紹興本」と明の馬元調校本の「馬本」がある。しかし、この「先詩後筆本」は白居易本来の編成の順序を顧慮しない。ところが朝鮮・日本には本来の編成順序に従った「前後統集本」が存在する。本書はこの「前後統集本」系統のテキストである。那波道円(名は觚、字は道円)が元和四(二六一八)年に刊行したもので通称「那波本」と呼ばれる。那波本が底本としたテキストは、朝鮮整版(天理図書館蔵)とする説と、朝鮮の銅活字版系統(宮内庁書陵部蔵書)とする説との二者に分れる。前者は花房英樹氏・平岡武夫氏、後者は藤本幸夫氏の説である。藤本氏は中で非常に緻密な考証をされており、朝鮮整版が那波本より後代に印出されたものとしている。

『四部叢刊』に収められている『白氏文集』は江南図書館所蔵の那波本を影印したものであるが、那波本と『四部叢刊』の間には文字の異同が見受けられる。那波本の特徴として自注・割注がほとんど削除されている点が挙げられる。本学附属図書館蔵の那波本には、削除された自注・割注が書き込まれている。書き込まれた反切や注は、恐らくそのほとんどが「明曆刊本」に拠ったものであるが、「明曆刊本」には書かれていない注も書き込まれている(注2)。点から、他本も並べて参照した可能性もある。また、巻七十巻末には那波本にはない「佛光和尚真讚 3797」・「醉吟先生墓誌銘 3798」の二作品が細字で書き込まれている。

(注1)「與元九書」に「又自武德訖元和、因事立題、題爲新樂府者、共二百五十首、謂之諷諭詩。又或退公獨處、或移病閒居、知足保和、吟詠情性者一百首、謂之閑適詩。又有事物牽於外、情理動於内、隨感遇而形於歎詠者一百首、謂之感傷詩。又有五言・七言・長句・絕句、自一百韻至兩韻者四百餘首、謂之雜律詩(又た武德より元和に訖るまで、事に因りて題を立てて、題して新樂府と爲す者、共に一百五十首、之を諷諭詩と謂う。又た或いは公より退きて獨り處り、或いは病を移けて閒居し、足を和を保ち、情性を吟詠する者一百首、之を閑適詩と謂う。又た事物、外より牽かれ、情理、内に動き、感遇に隨ひて歎詠に形する者一百首有り、之を感傷詩と謂う。又た五言・七言・長句・絶句、一百韻より兩韻に至る者四百餘首有り、之を雜律詩を謂う」とある。

(注2)「傷唐衢・其二0035(一巻一八帖ウラ)に「忝備諫官位」とあり、その欄外には「忝異本作末」とある。このことは明曆刊本ならびに現在の校注本には書かれていない。

(参考)平岡武夫・今井清校定『白氏文集 一〜三』京都大学人文科学研究所 一九七二〜一九七三  
花房英樹『白氏文集の批判的研究』朋友書店 一九七四  
藤本幸夫『朝鮮版『白氏文集』攷』太田次男他編『白居易研究講座第六巻』勉誠社 一九九五  
今原和正『那波本一付四部叢刊本との校異』同右 (加藤文彬)

## 一六 白氏文集(はくしぶんしゅう) 七十一巻二十五冊 (921.43-H19)

有界、黒双魚尾、四周双辺、各面十行、二十一字。墨訓返点。縦二十四・五cm、横十六・六cm。木活字版。題箋に「白氏文集一、二、三」(第一冊)。内題・尾題に「白氏長慶集卷第一(〜七十一)」。刊記に「京師三條通升屋町御書物所出雲寺和泉掾。出版年代不明だが、恐らくは明曆刊本の後刷り本かと思われる。

序は元稹「白氏長慶集」、附録として「新唐書本伝」、李商隱「唐刑部尚書致任贈尚書右僕射太原白公墓碑銘」、陶穀述「龍門重修白樂天影堂記(広順三(九五三)年)」、白居易「白氏長慶集後序」、立野春節の「白氏文集跋(万治元(二六五八)年十月中旬)」。「白氏文集跋」は最後の二葉を欠す。

本書は無年記のため出版年次不明であるが、明曆三(二六五七)年に刊行された、立野春節が明の馬元調校本に訓点を施した覆刻本、所謂明曆刊本の後刷り本であると思われる。

明曆刊本は基本的には馬元調校本を襲うものであるが、両者には異同がみえる。本書の訓点については、立野春節の「白氏文集跋」中に「時書林聞予偶得管家点本



而強求焉予嘉其擴世興衆俱而許之然而伝写既多訓点間逸亡仍私尋搜得別本於措大家秘府於是乎彼此相交以隨其宜粗補闕略以爲全備」とあるように、校点者が「菅家」と「別本」を並べ、宜しきに從つて補つたものであり、菅家点に他系統の訓が混じっていることになる。助字の訓法は使役の助字を除き、ほとんどが現行の訓法と同じである。また本書独自の訓点があるが、その大部分が誤読によるものである。それらの誤読は注になされた訓点に集中している点から、先行点本に依らずに訓点を付けた可能性もある。なお本学附属図書館にはもう一部稀覯本の『白氏文集』七十一卷十六冊（ル335-4）を蔵している。これは明嘉靖十七（一五三八）年の刊記を持つ伍忠光校本や同版の錢応龍梓本の後印本である。刊記はなく刷りもよくないが、後の流布本である馬元調校本以前の姿を窺える貴重な本である。

（参考）花房英樹『白氏文集の批判的研究』朋友書店 一九七四

宇都宮睦男『白氏文集訓点の研究』溪水社 一九八四

湯浅吉美「明曆刊本 馬元調本との校異」太田次男他『白居易研究講座第六卷 白氏文集の本文』勉誠社 一九九五

（加藤文彬）

## 一七 蒙求（もうぎゆう）一冊

（ヤ290-115）

室町時代後期写。表紙に「蒙求 任性」と打付けに書く。卷子本を袋綴に改装。注文なしの標題本。墨付き二二丁。各面七行、一行二句。縦二六・一cm、横一九・四cm。印記・弥家藏書。帙題簽に「室町後期古鈔本也」とあり、裏張に中田祝夫氏による「室町後期古写本也」の墨記がある。

唐・李翰撰。「孫康映雪、車胤聚螢」のように、中国の上代から南北朝までの有名な人の逸話で類似の事跡を一对とし、四字句計五百九十六句の韻文で、八句ごとに韻を変えて暗誦しよう工夫された幼学書。日本に伝わった時期については、奈良時代説もあるが、記録に見えるのは平安時代が初見である。「勸学院の雀は蒙求を囀る」の諺のごとく、平安から室町にかけての僧俗に盛んに学ばれ、意味の取りにくい棒読みで誦読されていたようである。

本書巻首には「蒙求一部 并序」と題し、「趙郡李華」の署名がある。序には「安平李瀚」から「不出卷知天下其蒙求哉」までの部分しかなく、「周易曰」から文末までの部分を欠く。全体に朱点、墨訓読を付す。本文は一行二句、標題に声点や振り仮名などが施されており、人名の下に朱線が付されている。標題の語句については、178（番号は

新釈漢文大系に拠る）「翟璜直言」の欄外に「補注曰日本作任非」とある注記が示しているように、南宋年間に刊行された徐子光による『蒙求補注』を引用し、古蒙求との相違を記す箇所がある。ただし、それらの箇所には「補注曰日本作云々」と、「旧本」と明記するのは左に挙げた一箇所のみで、省略される場合がほとんどである。たとえば<sup>244</sup>「陳重送金」の場合は、「陳重」の左側に「雷義」と表記し、「雷」と「義」にそれぞれ合点を付けた上で、「補注曰作陳重非」と傍記したように、「旧本」の二字が省略されている。それ以降は、<sup>414</sup>「蒼舒秤象」のように、「蒼」と「秤」の左側にそれぞれ「倉 補注」、「称 補注」とあるのみで、「補注曰云々」の「曰云々」の部分も省略されるようになる。「補注」と注記し、かつ補注の字に合点を付けるものが数多く、一見して徐注本の優位性を主張するように見受けられる。徐注本をかなり意識する一方、<sup>59</sup>「江革忠孝」、<sup>97</sup>「秦初日月」のような古蒙求に拠っているものも混在する。このことは、標題「王術忿狷」の「術」字は古蒙求と一致し、「忿」字は徐注本と一致することによって端的に示される。ただし、「術」の左側に「述 補注」と注記しており、ここではやはり徐注本に拠った注記を施している。また、本来なら<sup>484</sup>「趙禹廉倨」の後と<sup>521</sup>「廉頗負荊」の前に位置すべき、「亮遺巾幗」から「彦倫鶴怨」までの三十六句が、<sup>521</sup>「浩浩万古、不可備甄、芟煩撫華、爾曹勉旃」の四句の直前に置かれていることも注目に値することである。奈良表がなく、李華序は前半しかないことから見れば、本書は建保六（一一二八）年に書写された観智院本の系統に属するが、標題の順序が前後することは他本に見られない特徴である。なお末尾の四句には音訓両方の読み方が付されている。

表紙に見える「任性」は人名と思われる。この人物については、『山槐記』治承三（一一七九）年四月十六日「仁和寺若宮（中略）出家」条に、「水瓶（仁性）」などと見え、同十月十日「院宮為御受戒令向東大寺」条の「有職非職廿人」の中に、「任性（仁性）」と見える。これらの史料からすれば、任性は藤原信盛の息男で、出家して仁和寺の僧となったと考えられる。父信盛は久安三（一一四七）年から久安五年の間、隱岐守に任じられ（『本朝世紀』『台記』など）、仁平二（一一五二）年から仁平三年の二年間は上野介となっている（『兵範記』など）。また、『尊卑分脈』によれば、隱岐、下野、上野の介を歴任したとあり、藤原顕季の曾孫にあたる人物である。室町期になると、僧侶の書写による『蒙求』準古注本が目立つようになり、本書はあるいは任性所持本の標題を写したものであるうか。

印記に見える「弥家」は宿弥家である小槻家の藏書印で、これにより本書は小槻家に蔵されていたことが分かる。小槻家は太政官の左大史を世襲する家柄で、その伝来

とあれば由緒正しいものである。同じ蔵書印を有するものに、楊守敬取得卷子改装本の古注本がある。

(参考) 早川光三郎『蒙求解説』『蒙求』(新釈漢文大系五十八) 明治書院 一九七三

池田利夫『蒙求古註集成』汲古書院 一九八九

築島裕編『長承本蒙求』汲古書院 一九九〇

(馬耀)

## 一八 新刻蒙求(しんこくもうぎゅう) 三卷三冊 (イ 290-6)

刊行時期は不詳、明和四(一七六七)年刊本の後印本か。上巻と下巻に後補の表紙あり。中巻と下巻の元表紙に二重匡郭の刷題簽があり、「新刻蒙求 再板」と記す。「標題徐状元補注蒙求」の内題あり。縦二六・八cm、横一八・〇cm。四周単辺、有界、每半葉一行、注文の行、一字下がりの二〇字、朱点・訓点・送り仮名付き。印記には三巻共通の「故教授文學博士那珂通世遺書」、上巻のみの「伊藤藏書不許他見」(陰刻)と中巻のみの「梧樓主人坐右圖書」などがある。

欄外に希に注の異同や注を補う簡単な注記がある。例示すると、4「呂望非熊」の注文が引く『六韜』の「非虎、非熊」に対し、欄外に「搜神記古語作非熊非熊」と、同じ説話を記載する『搜神記』巻八の呂望が占い出される箇所の古語を記すたぐいである。

上巻巻首には、服元喬(服部南郭)による「新刻蒙求序」(己未(一七三九)仲夏)、「薦蒙求表 饒州刺史李良上表」、「蒙求序 趙郡李華」、徐子光による「子光序」、元文四(一七三九)年の年記を有する南郭次男の惟恭による「蒙求考例」があり、それと連動して版心は「新刻蒙求 序」、「新刻蒙求 旧序」、「新刻蒙求 序例」、本文版心は「標題上」、「新刻蒙求 卷之上」となっている。中巻と下巻の版心は「標題中(下)」と「新刻蒙求 卷之中(下)」の二種のみ。巻下末二丁にわたり「平安書肆植村玉枝軒儒書蔵板目録」があり、その末尾に「京都書林玉枝軒 堀川通高辻上ル丁 植村藤右衛門」などの書肆名が記されている。

(馬耀)

## 一九 増註唐賢三体詩法(ぞうちゅうとうけんさんていしほう)

三卷三冊 (ル 320-325)

周弼(宋)編。釈円至(元)注。裴庠(元)増注。

(室町時代後期)刊。阿佐井野版。有界。各面一〇行、二三字。注文双行。縦二五・〇cm、横一八・六cm(巻一)、縦二六・七cm、横一八・九cm(巻二、三)。巻一と巻二、巻三との寸法が異なるのは、修補の際巻一のみ化粧裁ちしたためと思われる。巻一のみに墨による訓点、固有名詞等への朱引あり。

刊記(巻一末) 明応甲寅之秋新板畢工矣先是旧刻之在/京師者散失于丁亥之乱以故損費刊行焉/置板於万年広徳<sup>云</sup> 葉菓子敬誌(陰刻)。

跋文(巻一末) 此板流伝自京至泉南於是阿佐井野/宗禎贖以置之於家塾也欲印摺之輩/以待方来矣。

刊記に、原版木が応仁の乱(丁亥之乱)で焼けたので、明応三(一四九四)年に相国寺の光源和尚(号を葉菓子)が復刻再刊した板木が泉州堺に流伝し、それを阿佐井野宗禎が購入して印行したものと書かれており、阿佐井野版である。阿佐井野家は屋号を野遠屋といい室町時代和泉堺の医家で、出版事業に尽力した。

本書は、南宋の詩人周弼(生没年未詳)が中晩唐を中心とした唐詩を五言律詩・七言律詩・七言絶句の三体のみ集めて、「虚実」の観点から分類編集した「三体詩」として一般に知られる集(単に漢詩を集めただけでなく、独自の観点に基づく分類を行うことで詩法を示した集でもあるため、「三体詩法」の書名が用いられている)の注釈書で、「増註本」と呼ばれるものである。「三体詩」の注釈書としては、元代までに二つの注釈書が作られ、現存本として「増註本」のほか「箋註本」「集註本」の三種が知られる。この三種について、作成された順にそれぞれの注釈者と特色を示すと次のようである。

①箋註本 天隱円至(一二五六〜九八)注。一三〇五年序。原型は二十一巻、流布本は二十巻。七言絶句・七言律詩・五言律詩の順。天隱の注は詩の内容に即したものである点に特色がある。

②集註本 裴庠(生没年未詳、字を季昌)注に若干の天隱注を補う。一三〇九年自序。五言律詩・七言律詩・七言絶句の順。季昌の注は語注を中心としたものである点に特色がある。

③増註本 天隱注に季昌注を増補したものの。箋註本と同様七言絶句・七言律詩・五言律詩の順。

日本では右の三種の注釈本のうち南北朝期に集註本が覆刻（かぶせ彫り）されたがあまり流布せず、室町初期に増註本が覆刻される（五山版）と、以後圧倒的に増註本が流布し、応仁の乱で版木が失われたものの明応三（一四九四）年には相国寺において覆刻され（明応版）、さらにその版木が堺の阿佐井野氏によって増刷された（阿佐井野版）。五山版、明応版、阿佐井野版それぞれに覆刻があり、近世初期の訓点本へと継承された。

増註本の特徴としては、七言絶句を最初に置く箋註本の配置を踏襲したこと（箋註本の配置自体、禪家における詩偈が七言絶句を中心とすることに則った処置かと考えられる）、唐代の歴史地図、歴代皇帝・年号の一覧、作者略伝など内容理解を助ける情報を付加していることなどが挙げられる。このような特色は、「三体詩」の初学者入門書的な性格をさらに強めることとなったと考えられる。室町期から江戸期にかけて、三巻のうちでも特に巻一（七言絶句）が中心的に受容され（本点の墨書、朱引のあり方からもそれが窺える）、【二〇】【二一】のように巻一のみの注釈、刊行が広く行われた。

（参考）村上哲見『三体詩』（朝日文庫・中国古典選）朝日新聞社 一九七八

堀川貴司『三体詩』注釈の世界』『詩のかたち・詩のこころ』若草書房 二〇〇六

（清登典子）

## 二〇 増註唐賢三体詩法（ぞうちゅうとうけんさんていしほう）

巻一（巻二・三欠）一冊（ル 320.485）

周弼（宋）編。積円至（元）注。裴廐（元）増注。

〔江戸時代初期〕刊。四周双辺。無界。各面一〇行、二二字。注文双行。訓点付き。朱引。墨書入。縦二七・八cm、横二〇cm。

刊記・跋文：【一九】に同じ。

印記・高木家蔵（高木利太）<sup>（注1）</sup>。了庵（壺型裏）。

本書は、阿佐井野版【一九】<sup>（参照）</sup>の覆刻本文による訓点本であり、覆刻（かぶせ彫り）された証左として刊記中に脱字、誤字が見られる。また、室町期刊本には見られた本文中の界線（野線）が用いられていない（訓点を傍記するための措置と考えられる）など、江戸期刊本の特徴を見ることができ。

江戸期には多くの増註本系三体詩が訓点本として刊行され、文人たちに多くの影響を与えたと考えられる。たとえば、松尾芭蕉（一六四四〜九四）の『奥の細道』<sup>（参考四）</sup>中の「冥天に白髪を重ぬといへども」の一節について、「三体詩」に収まる李洞「送三藏歸西域」の「五天到日応頭白」を踏まえた表現であるとの指摘がなされている（富山奏『異端の俳諧師芭蕉の芸境』和泉書院、平成三、など）。

（注1）印記により知られる旧蔵者、高木利太（一八七二〜一九三三）は、中津藩士の家に生まれ、大阪毎日新聞社取締役となった人物。書齋を甲麓荘と称し、地誌類および古活字版の集書で知られ、「家蔵日本地誌目録」の編がある。

（参考）川瀬一馬編『高木文庫古活字版目録』一九三三

（清登典子）

## 二一 増註唐賢三体詩法（ぞうちゅうとうけんさんていしほう）

巻一（巻二・三欠）五冊（ル 320.487）

周弼（宋）編。積円至（元）注。裴廐（元）増注。

〔室町時代後期〕刊〔室町時代初期〕刊（五山版）の覆刻本。左右双辺。有界。各面一〇行、二二字。注文双行。縦三二・六cm、横二三・六cm。

印記・高木家蔵（高木利太）。

本書は、大判の紙に「室町時代後期」刊本（五山版の覆刻本）『増註唐賢三体詩法』の巻一（七言絶句）本文の匡郭内部分だけを適宜切つて貼り、周りのスペースに『晁風集』（万里集九<sup>（注1）</sup>著、十六世紀初め成立の三体詩注釈書）などからの注釈を記入した抄物であり、注記のためのスペースが足りないところには半葉ほどの紙を挿入してある。

（注1）『晁風集』の著者、万里集九（一四二八〜？）は、室町時代の僧で、名は集九または周九。梅庵と号した。はじめ京都の相国寺にいたが、応仁の乱により近江・美濃・尾張などを放浪のち美濃の鵜沼に居を定め詩の教授を行った。また文明十七（一四八五）年に江戸に出、さらに越後に滞在の後、美濃に帰った。『晁風集』のほか、詩集『梅花無尽蔵』、蘇軾詩注釈『天下白』、黄庭堅詩注釈『帳中香』などの著書がある。

（清登典子）

江戸時代前期刊版(無刊記) 四周単辺、無界。 毎半葉八行毎行十五字、注文双行。 縹色無地表紙(原装か)に打ち付けで「遊仙窟」と墨書あり。 黒口単魚尾。 縦二四・五cm、横一七・二cm 訓点(返り点・読み仮名・送り仮名)付。 版心:遊仙窟一(六十五)。 五七葉以降破損甚、六五葉裏(跋文後半)欠損。 印記:秋山友安(陰刻)

『遊仙窟』は初唐の官人である張鷟(一説に六六〇〜七三三年)、字は文成が、寧州襄樂県尉の職にあつた高宗期末年(高宗の在位は六四九〜六八三年)ころに書いた伝奇小説。任を帯びて黄河上流の河源へと向かつた張文成が、その途中、金城(現在の甘肅省蘭州)の南西にあたる積石山付近で、神仙の住む館に入り込み、仙女と過ごした一夜の交歓を描いたもので、伝奇小説では著者自身の実体験を記すという建前がとられることが多い。当時としては珍しいポルノグラフィックな描写もあり、作者の遊里での体験に基づいた虚構とも言う。四六駢儷体で書かれ、多くの詩文を収めるが、中国での評価は高くなく早くに亡佚した。

『遊仙窟』の日本への伝来時期は比較的是つきりしている。山上憶良の二次の遣唐使帰国のおり(慶雲元「七〇四」年、養老二「七一八」年)のいずれかに将来されたものと考えられる。『萬葉集』にはすでに多くの影響が見え、平安時代以降も愛読されてきたことは、近年『伊勢物語』や『源氏物語』などが、『遊仙窟』に多く影響を受けていることが明らかとなったことで分かる。ただし六朝風の駢儷体のなかに唐代の俗語が混ざるといふ、日本人にとつては難解な作品であつたことはまちがひなく、それゆえ本書の文保三(一一三一九)年の年紀を有する跋文(六五葉)にあるような、読解、訓読にまつわる木嶋明神の不可思議な説話が生じたのであろう。

日本には康永三(一一三四)年書写の醍醐寺本(【参考五】複製 イ300-284)を始めとして、古鈔本が伝わっている。これらには詳細な訓点が付されており、おそらくは博士家において、難解な語の訓読が討究されたものであろう。いわゆる「文選読み」が多いこともそのことを裏付けている。

本書はこのような古鈔本に基づき江戸時代前期に刊行されたものであるが、底本は定かではなく、二系統の本を校合した校訂本であると考えられている。訓点についても醍醐寺本に比較的近いものがあるが、全同ではなく陽明文庫本などの訓も付加されたようである。なお本書は有注本であり、この注については中国人作・日本人作の両

説が存在するが、現在では中国作とする説が有力である。

中国において『遊仙窟』が紹介されたのは、清光緒二十三年(一八九七)年に刊行された楊守敬『日本訪書志』(【参考六】イ050-238)が最初であろう。しかしその記述は『唐書』を踏まえたもので作品の価値を過小に評価するものであつた。その意味で本作を初めて中国文学史に位置づけたのは魯迅だと言える。魯迅は本作を中国に全文紹介するにあつて民国十六(一九二七)年に序文を書いている。そのなかで「不特當時之習俗如酬對舞詠、時語如睡語・嫵媚、可資博識。即其始以駢儷之語作傳奇、前于陳球之『燕山外史』者千載、亦為治文學史者所不能廢矣」と、ただに唐代の風俗・言語を知ることができるだけでなく、文学史上においても駢儷体で傳奇を書くことに価値を見出している。この序文を付して一九二九年に川島(本名章廷謙)によつて出版されたのが、【参考七】(北新書局刊 923.4.C52)である。

なお本書には別に無刊記版に「慶安五畷威孟春吉巨/中野太良左衛門開版」の木記を入木した後印本を蔵する(923.4.C52)。

(参考) 吉田金彦「和訓からみた遊仙窟の諸本」「国語国文」二五・一七 一九五六  
小島憲之「上代日本文學と中國文學―出典論を中心とする比較文學的考察―中」塙書房 一九七二

蔵中進「『遊仙窟』訓読伝説に関する一考察」「論集日本文学・日本語 一」角川書店 一九七八  
蔵中進編『江戸初期無刊記本 遊仙窟 本文と索引』一九七九 和泉書院  
林望「遊仙窟の諸本につきて」「東横国文学」一三 一九八一  
今村与志雄訳『遊仙窟』岩波書店 一九九〇  
東野治之編『金剛寺本 遊仙窟』塙書房 二〇〇〇  
北山円正「シンポジウム「唐代伝奇と平安朝物語」にちなんで」「和漢比較文学」四四 二〇一〇

山本登朗「『遊仙窟』文化圏」構想は可能か―「かいまみ」と「女歌」― 同右  
新聞一美「源氏物語と唐代伝奇―基層としての遊仙窟―」同右

(谷口孝介)



一三一 遊仙窟鈔 (ゆうせんくつしょう) 五卷五冊

(923.4C52)

元禄三(一六九〇)年刊本の比較的早い時期の後印本(無刊記) 縹色無地表紙。刷題箋: 遊仙窟抄 一(一五)。内題: 遊仙窟 卷一(一五)。四周双辺、無界。毎半葉七行毎行一二字、注双行。 版心: 首書 遊仙窟卷一(一五) 幾。 尾題: 遊仙窟卷幾終。

元禄三年東海散人序、同年一指無方蚌眼自序。文保三(一三二九)年文章生英房序。巻五巻末に注者による和文解題一丁半を付す。

本書はおそらく慶安版本などの有注本によりつつ、さらに本文と注とに㊦㊧㊨などの注符号を記入し、それと対応するように頭書として和文による注解を施すものである。注者の一指無方蚌眼なる人物はまったく不明としか言えないが、呉音唐音による字音表記が多用されることから、釈氏の可能性が言われている。注釈の方法については、ほぼ原注を訳解するかたちではあるが、和歌を引用したり、慣用句・諺などを引用したりすることで、理解に資するよう工夫がなされている。また当時の俗語に置き換えて理解を容易ならしめようとするところも見受けられる。また慶安刊本に見られた煩雑なまでの付訓については、適宜省略を施し、一通り読み下せるように配慮されている。

本書は明治期に至るまで幾度となく増刷されたようで、さまざまの後修本の存在が知られている。本学にも他に明治期に刊行された五巻二冊本を蔵している(ル380-72)。

(参考) 林望解説『遊仙窟抄 上下』勉誠社 一九八一  
宇都宮睦男『元禄三年刊『遊仙窟鈔』の「俗」注記について』『解釈』三七、四 一九九一  
宇都宮睦男『元禄三年刊『遊仙窟鈔』の注釈法』『日本文化論叢』一 一九九三  
(谷口孝介)

二四 和漢朗詠集 (わかんろうえいしゅう) 二巻二冊 (ル246-17)

元龜三(一五七二)年写。 識語: 于時元龜三年壬申季初春廿七日 主良全房後覽御方題字頼入候「本文と別筆」。 印記: 高木家蔵(高木利太)。 縦二六・五cm、横一八・六cm。 袋綴。

『和漢朗詠集』は、平安中期の和漢兼作の文人、藤原公任(九六六〜一〇一四年)が、和歌と中日の漢詩文の秀句との中から朗詠に相応しいものを、『千載佳句』などの部立を参考にして部類別に編集したもの。寛弘九(一〇二二)年ころに成立。上巻は春・夏・秋・冬の各部、下巻は雑部とする。各部においては、上巻は歳時を先に季節的風物を後にして六十六題を立て、下巻では風・雲・晴・暁(天象)などと、類聚意識をもつて四十八題を立てている。漢詩文では、中国では白居易、日本では菅原文時が重視されており、平安時代中期の文人の嗜好をよく反映している。一方、和歌は紀貫之の二六首を筆頭に、凡河内躬恒(一二首)、柿本人麿・中務(八首)が続く、『古今和歌集』の撰者としての貫之・躬恒に対する公任の傾倒がうかがわれる。

本書は全体に朱墨によってヲコト点・声点・訓が付されている付訓本であるが、詩文の作者名・詩題などの注記は、伝藤原公任筆巻子本などと等しく書かれていない。系統は明らかでないが、四九番の後に嘉禄本のみに見られ諸本にない「いざげふは」の『古今和歌集』九五番歌があり、嘉禄本との近縁性がうかがわれる。伝来も不明だが下冊末尾に「当年十二月書已 本主法久寺」と見える。

(谷口孝介)

## 二五 新編古今事文類聚(しんぺんここんじもんるいじゅう)

前集六十巻 後集五十巻 各目不分巻 続集二十八巻 別集三十二巻 各目一卷 新集三十六巻 目不分巻 外集十五巻 遺集十五巻 各目一卷 一百冊  
(イ290-212)

宋祝穆編 (新外) 元富大用編 (遺) 祝淵編 菊池耕齋校並点

寛文六年刊(京八尾勘兵衛) 覆「明末」徳寿堂刊本 鹿嶋則文旧蔵

本書の編者祝穆は、南宋時代(十二〜三世紀)の人。新安(安徽)を本籍とするが、曾祖父は朱熹(一一三〇〜一二〇〇)の外祖父に当たり、父の代に朱氏を追って、建陽(福建)に移住した。祝穆も幼くして朱氏の私塾に入ったが、その関心は道学に止まらず、広く江南に遊び、各地の記事見聞を集めた地誌『方輿勝覧』を公刊した後、淳祐六(一二四六)年、歴世の故事と詩文を集め、この『新編古今事文類聚』(略称「事文類聚」)を編成した。晩年は建陽麻沙の地に隠居し、宝祐六(一二五八)年以前に世を去っている。総じて祝氏は、士大夫参考書の編集を通じ、地元建陽の出版業と深く関わったようである。

『事文類聚』は、中国式の百科全書である「類書」の典型で、天文地理を先とし、人事や草木に及ぶ伝統的な意義分類を踏襲するが、前後統別と編集を次ぐ形は、資本の集中が難しかった宋末の出版業態と関わっている。内容の面では、文集の機能を併せた『藝文類聚』や、作文の要語を標出した『初学記』など、唐代の類書を参考とするが、宋代に発達した「詩話」の項目を置いた点は新味があり、巻頭の周敦頤「太極図説」や、朱熹等の道学者の著述を加えた点は、編者の学歴を反映している。また編目を強調し、文字の大小を組み合わせて本文の組織を知らせる工夫は、編集と一体であった当初の版刻に溯るであろう。

なお本書の新集と外集は元の富大用の続編に係り、遺集は祝淵の続編によるが、両編者の履歴の詳細は不明である。元代の版本や、日本の室町以前の引用に、この祝淵遺集の存在は確認されず、版本の上では明代後半になって現れる。

現存する『事文類聚』の版本は、元泰定三(一三二六)年廬陵(江西)武溪書院刊行の前後統別新外の六集本を最古とし、祝穆在世時の版本は確認されない。しかし明代には建陽に元版覆刻本、鄒可張校刊本、万曆三十五(一六〇七)年劉双松刊本が現

れた他、宮廷蔵版の経廠本や、南京の唐富春が万曆三十二(一六〇四)年に刊行し、遺集を加えた七集本、徳寿堂によるその覆刻本が出た他、早くから朝鮮と日本にも伝播し、朝鮮では甲辰銅活字刊本と、抄録の『事文類聚抄』類が刊刻された。

日本では南北朝以来、主として元版に依拠する受容があり、室町時代の学問の隆盛に伴い、五山禅院とその周辺で広く参照された。その流行は近世に及び、林羅山、北村季吟といった江戸時代前期の学者にもよく用いられた。この間、江戸初期に朝鮮の甲辰字本を翻印した古活字本も刊行されたが、寛文六(一六六六)年、展示の菊池耕齋点校本が出て、本格的に普及した。なお別に延宝五(一六七七)年刊行の抄出本もある。

菊池耕齋(一六一八〜八二)名は東勾。京の人。藤原惺窩門下の菅玄同に句読を習い、師の歿後、寛永十(一六三三)年江戸に行き林羅山に就く。医業では野間玄琢の門に入り、儒医となつて久留米藩、薩摩藩に招かれ遊歴した。この間、万治三(一六六〇)年に本拠を江戸に移し、晩年は著述に専念したという。彼は在京中から、八尾勘兵衛等の出版書肆と関係を持ち、『陶靖節集』『田機活法』『五車韻瑞』と、この『事文類聚』に訓点を加え校刊している。耕齋は純粹の儒者というより、該博を宗とする啓蒙期の学風を帯び、活計のため詩字書に附訓したことは通俗と称しうるけれども、漢学普及の観点からは、大きな業績を挙げたと言える。

本書の早印本に附する寛文元(一六六一)年の跋によると、耕齋は早くに、六集からなる船載の唐本を入手、一、二、三巻の閲読を日課としたが、温習に及ばなかつた所、八尾勘兵衛友久が七集本を携え訓点を求めて来たので、これに応じたのである。本版の印面を見ると、行間に校注の傍記を含むことが注意される。これは、家蔵の六集本を以て、八尾提供の七集本に校合したのである。六集本は明版と思われるから、建陽系統の本に当たり、七集本は南京刻本の系統と思われるが、現に本版の底本は明末の徳寿堂刊本と見られ、その校字は建本に一致する。

また本書の附訓には耕齋の学力を動員し、隈なく全編に及んでいるが、陶淵明の著作は、先に附訓した『陶靖節集』の点をそのまま用い、『文選』に収録の文章は、別に移録した博士家流の訓点を用いるなど、積年の読書の成果を注ぎ込んでいる。総じてこの『事文類聚』の出版は、江戸前期の和刻本漢籍の成り立ちや、訓点の流動、商業出版の興隆と漢学者との関係を伝えている。

(住吉朋彦)



菅家文草卷拾  
三、月、相、本、漢、文學、二、班

二六 歷聖大儒像（聖賢像軸）

⑤ 邵子



③ 程叔子



① 周子



② 程伯子



④ 張子



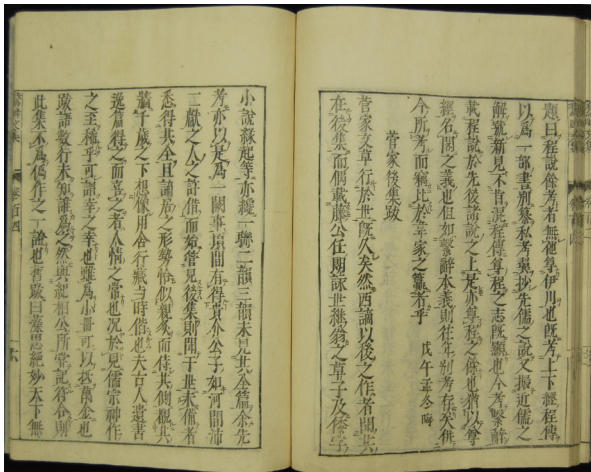
⑥ 朱子



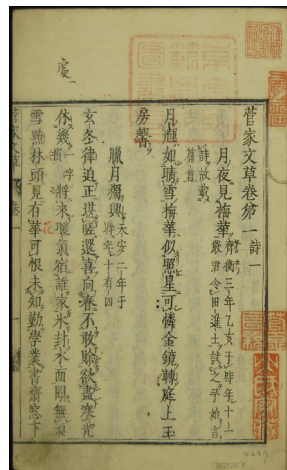
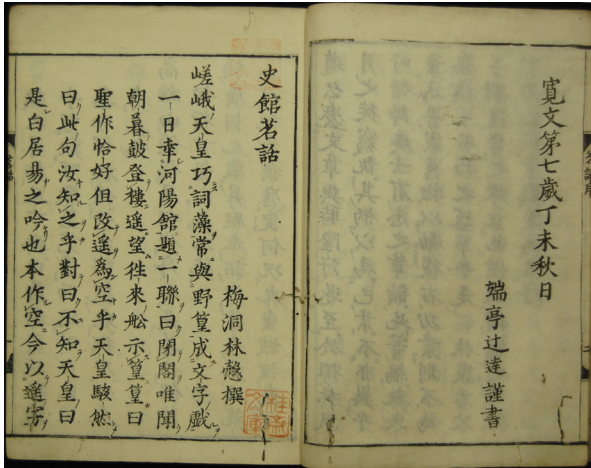




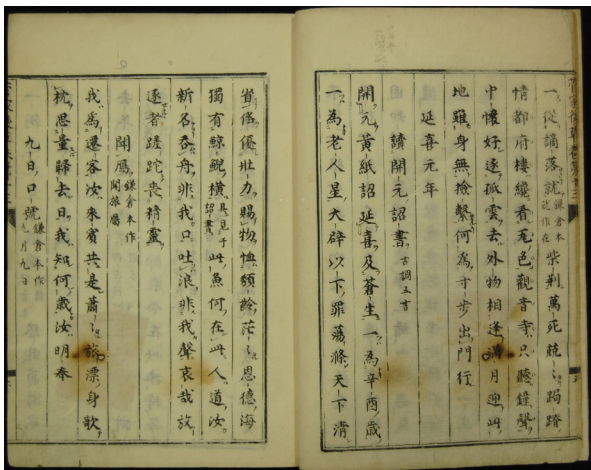
卷八十六(第三十九冊)  
「狩野永納家伝画軸序」



二九 史館茗話

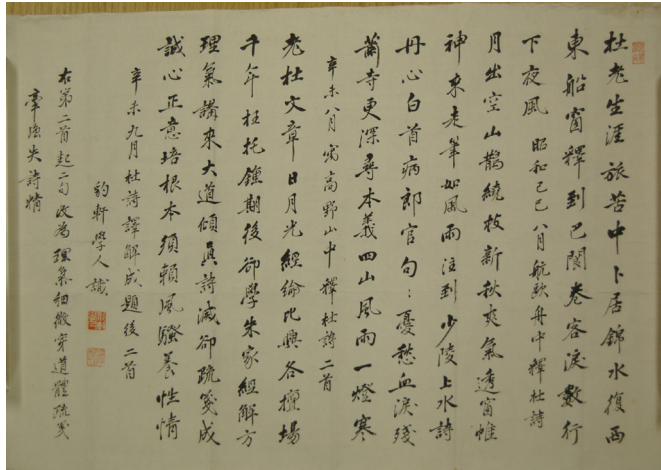


三一 菅家後草



三三 鈴木虎雄關係史料より四件

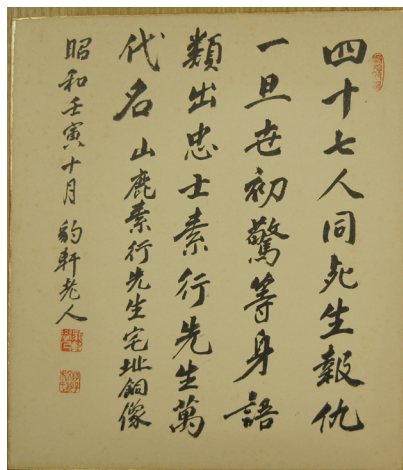
「杜詩訳解成題後二首」ほか



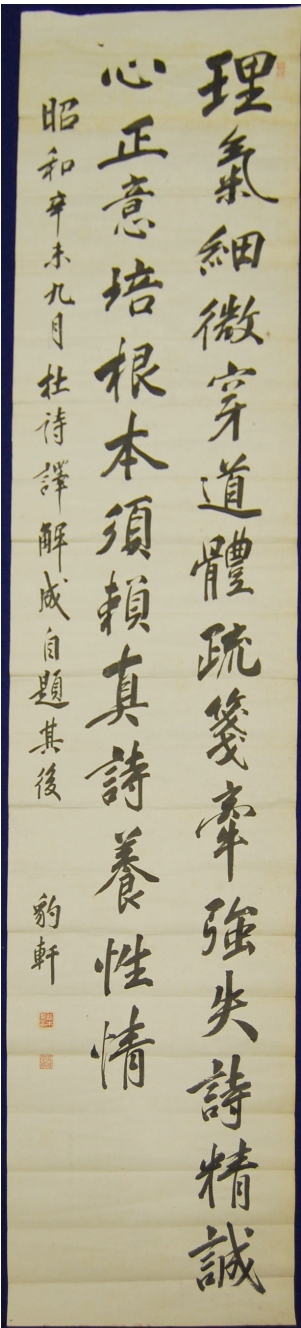
「豹軒退休集葯房主人歌草先後刊成志感」二首



「山鹿素行先生宅址銅像」



「杜詩訳解成自題其後」



二六 歴聖大儒像（聖賢像軸）（れきせいだいじゅぞう）六幅

(721.4Ka58)

寛永九（一六三二）年、狩野山雪画、寛永一三年、金世濂賛書。各画面縦一三〇cm、横四四・五cm。紙本着色。花鳥文錦表装。牙軸。

概説において述べたように、この画幅は、寛永十年の復興積奠のさい先聖殿に掛けられたものである。その三年後、十二月、朝鮮通信使として来日していた金東溟（世濂）が儒者であることを知った林羅山は、東溟に家蔵の聖賢図像二十一幅の図上に先人の賛語を揮毫してもらうことを願い、東溟はそれに応えて書して返したという（「聖賢像軸」『羅山文集』六十四）。羅山が差し出した賛語は、周子から邵子までの五賢人については朱子の賛、朱子については元の呉澄の賛である。これらはいずれも『聖賢像賛』（明崇禎五（一六三二）年初版）に載せられているものである。ここにその賛を画幅の序列に従って掲げておく。

①周子 道喪千載、聖遠言湮。

不有先覺、孰開我人。

書不尽言、図不尽意。

風月無辺、庭草交翠。

道は喪びて千載、聖遠くして言湮む。

先覚あらずんば、孰れか我人を開かん。

書は言を尽くさず、図は意を尽くさず。

風月無辺にして、庭草交ごも翠なり。

②程伯子 揚休山立、玉色金声。

元氣之会、渾然天成。

瑞日祥雲、和風甘雨。

龍徳正中、厥施斯普。

揚休山のごとく立ち、玉色にして金声なり。

元氣の会、渾然として天成る。

瑞日祥雲、和風甘雨。

龍徳にして正中なり、その施し斯に普し。

③程叔子 規員矩方、繩直準平。

允矣君子、展也大成。

布帛之文、菽粟之味。

知徳者希、孰識其貴。

規のごとく員く矩のごとく方に、繩のごとく直く準のごとく平かなり。

允なるかな君子、展びてはまた大成す。

布帛の文、菽粟の味。

徳を知る者は希に、孰れかその貴きを識らん。

④張子

早悅孫呉、晚逃仏老。

勇撤臯比、一変至道。

精思力踐、妙契疾書。

訂頑之訓、示我広居。

早に孫・呉を悦び、晩く仏・老に逃る。

勇んで臯比を撤て、一に變じて道に至る。

精思力めて踐み、妙契疾く書す。

訂頑の訓、我が広居に示す。

⑤邵子

天挺人豪、英邁蓋世。

駕風鞭霆、歴覽無際。

手探月窟、足躡天根。

閑中今古、醉裏乾坤。

天挺の人豪、英邁は世を蓋う。

風に駕し霆を鞭うち、歴覽際なし。

手づから月窟を探り、足は天根を躡む。

閑中の今古、酔裏の乾坤。

⑥朱子

義理精微、蚕糸牛毛。

心胸恢廓、海濶天高。

豪傑之才、聖賢之学。

景星慶雲、泰山喬岳。

義理精微なること、蚕糸牛毛のごとし。

心胸恢廓なること、海濶く天高きのごとし。

豪傑の才、聖賢の学。

景星慶雲、泰山喬岳のごとし。

（参考）鈴木健一「儒教と題画文学」『解釈と鑑賞』六三・一八・一九九八  
『筑波大学附属図書館所蔵 日本美術の名品』二〇〇〇年五月、特別展図録

（谷口孝介）

二七 鶯峰先生林学士全集（がほうせんせいりんがくしぜんしゅう）

文集百二十卷目二卷 詩集百二十卷目三卷 附自叙略譜一卷

百五冊

（レ295-13）

元禄二（一六八九）年刊。 目錄題…鶯峰先生林学士全集、鶯峰先生林学士詩集。  
序首題…鶯峰先生林学士全集。 題簽題…鶯峰林学士文集、鶯峰林学士詩集。 四周  
単辺、無界。 每半葉九行每行二十字。 付訓返点。 序は六行十一字大型活字。 各  
冊縦二七・三cm、横一九・〇cm。 袋綴。 印記…明倫堂書庫記（名古屋藩校）。 御拂下。  
中島誠逸。

江戸時代初期の儒学者、林鷺峰（名は恕または春勝、鷺峰は号。一六一八～一六八〇年）の詩文全集。第一冊巻頭に元禄二年八月付の、鷺峰の二男鳳岡による「鷺峰先生林学士全集序」と「鷺峰先生林学士全集凡例」とが置かれている。鷺峰は羅山の三男で、四十才で林家を嗣ぐ。林家の私塾を幕府の官学のような扱いに昇格させ、後の昌平黌の基礎を築く。また幕命により編纂されていた『本朝通鑑』三百十巻を、邸内に国史館を営んで、寛文十（一六七〇）年に完成させた。他に『国史館日録』『本朝一人一首』などの著作が知られる。詩文集には外交文書はじめ公的立場によるもの以外に種々の作品があり、文集巻七十七から七十九の三巻を費やす「西風涙露」は、寛文六（一六六六）年に早逝した長男梅洞を追悼した文章で、個人的な感情の流露を八十七段の長文に託したものとして特徴的である。他に今回の展示に関連した作品として次のようなものがある。巻八十六（第三十九冊）の「狩野永納家伝画軸序」（寛文九年）には【二六】「歴聖大儒像」が羅山によって制作された経緯が記されており、「今に伝へて忍岡の文庫に存す。積菜（積奠のこと）ある毎に、聖堂の両廡に陳設す。人々の観るところなり」とあり、「歴聖大儒像」の使用の実際が知られて貴重である。巻百二（第四十五冊）の「補点白氏文集跋」は、父羅山が半世紀以上前に入手した「那波氏刊本」の【一五】『白氏文集』七十一巻の四十巻までに旧鈔本の訓点を移点したままになってしまったものを、延宝元（一六七三）年の今に至つてようやく残り三十一巻に点を加えることができたことを言う。その間明暦刊本（一六）【参照】が出版されたが、その訓に誤りが多いことも言及している。この親子二代にわたつて付訓された那波本『白氏文集』は現在宮内庁書陵部に蔵されている。また巻百四（同冊）の「菅家後集跋」は延宝六（一六七八）年当時、稀覯本であった菅原道真の『菅家後集』（三二）【参照】を、さる大名（貴介公子）に閲覧を許され書写したおりのことが記されている。名のみ知れて初めて実見する「儒宗」道真の「神作」に触れた興奮が伝わる文章である。

本書は印記より尾張藩校明倫堂私下げ本であることが分かる。

（参考）日野龍夫編集・解説『近世儒家文集集成 十二 鷺峰林学士文集 上下』ぺりかん社 一九九七

（谷口孝介）

## 二八 本朝一人一首（ほんちよういちにんいっしゆ）十巻五冊

（凡 294・10）

刊記：寛文乙巳（一六六五年）仲春既望（十六日）／室町通鯉山町／田中清左衛門刊行。刷題箋：本朝一人一首 三之四（九之十）、第一冊は題箋欠、内題：本朝一人一首巻之一（一六）、本朝一人一首詩巻之七（一七）、小口書きの書名：本朝一人一首四周単辺、每半葉十一行、単魚尾。墨書と朱墨の書き入れあり。縦二七・五cm、横一八・七cm。

第一冊巻頭に「本朝一人一首序」（万治三（一六六〇）年秋季、向陽林子）、第十冊巻十後に「本朝一人一首附録」（万治三年庚子九月二十六日、向陽林子）、本朝一人一首後序（万治庚子季秋、読耕子林靖）、題本朝一人一首後（門生金節）、本朝一人一首跋（万治庚子冬之孟春信）などがあり、さらに鷺峰による「本朝一人一首補遺」があり、後日遺漏が見付ければ増補すべきことを付言する。

著者林鷺峰については【二七】参照。「本朝一人一首」は序によると、父羅山が壮年時に編纂した『唐宋元明一人一首』の後、『本朝詩選』を編んだが明暦の大火（一六五七年）で焼失してしまい、やむなく跡を継いで鷺峰が『唐宋元明一人一首』を範として新たに編んだものである。近江朝から鎌倉期に至る日本漢詩を作者一人につき一首を掲出し、詩後に一格下げで「林子曰」として、詩語の注釈、作詩動機または詩人に関する逸話などを記す詩話的要素を持つものである。配列は史家の資質を反映してかなり厳密な時代順により、内容は、巻一が『懷風藻』、巻二・三が勅撰三集、巻四が『雑言奉和』『本朝文粹』など、巻五が『本朝麗藻』、巻六が『本朝無題詩』、巻七が鎌倉時代以降の作品、巻八が一聯の詩句のみを存するもの、巻九が擬作や無名氏作および怪誕、巻十が中国の書物に収録された日本人の作品を取りあげている。今日から見れば若干の錯誤もあることはやむをえないが、作者の伝記事項、詩の解釈・批評など随所に優れた評言が多々存し、日本漢文学史研究の嚆矢に位置する著作と言える。また巻十巻後の「本朝一人一首附録」は要を得た日本漢文学史の記述となっており、今日においても基本的なその視座は揺るがないものである。

（参考）大曾根章介『「本朝一人一首」と「史館茗話」―林家の日本漢文学研究について―』『国語と国文学』五八・一一 一九八一

佐野正己解題『詞華集 日本漢詩 一』汲古書院 一九八三

小島憲之校注『新日本古典文学大系 六三 本朝一人一首』岩波書店 一九九四

（谷口孝介）

## 二九 史館茗話(しかんめいわ) 一冊

(ル 290-2)

刊記・寛文八載(一六六八) 歳南呂(八月) 中旬/洛陽小川/林和泉椽板行。後補の書き題簽・史館茗話 版心・茗話 四周单边、每半葉八行每行一五字 縦二七・〇cm、横一九・〇cm。

見返しに墨書書き入れあり。 印記・南摩文庫。桂齋文庫。学宝。

巻頭に史館茗話序(寛文七(一六六七) 歳丁未秋日 端亭辻達)、一三丁裏に続帖之序(丁未春之仲月之閏、館之休老爺學士)、巻尾に跋(丁未夏之孟、国史館林叟)。

『史館茗話』は鶯峰男梅洞(一六四三〜一六六六年)が、父に従い国史館における『本朝通鑑』編纂事業に携わっていた余暇に執筆された作品で、平安時代の漢詩文に関する逸話を諸書から拾遺し自己の料簡を加えたものである。四十二条で志を遂げずに寛文六(一六六六)年に早逝したので、父がその続篇五十八条を補って寛文八年に刊行された。その間の事情については、羅山門下の辻端亭(一六二四〜一六六八年)序および鶯峰による続帖之序と跋とに痛切な悲哀の情とともに語られている。鶯峰にとつて嗣子梅洞を早く喪つたことは、『二七』にも述べたように痛恨事であり、本書の補遺完成も亡子への手向けのわざであったことが知れる。

本書執筆の意図は端亭序に言うように、平安時代において漢詩文が隆盛であったことを世間に知らしめるためであると言う。ことは著者梅洞の文学的資質に多く拠るもので、続帖五十八条の鶯峰執筆部との間に記述態度に大きな差が存する。梅洞遺著はほとんど批評を挟まない簡要な記述となつてゐるのに対して、鶯峰補筆部は『二八』『本朝一人一首』と同じく事績に関する道德的批評や伝記考証などに筆が費やされることが多い。これは梅洞が主観的評言を避けて王朝の文事を記述することで王朝憧憬の念を表そうとするのとは逕庭がある態度と言える。本書はまさに書名の通り国史館における通史編纂事業の余話としてなつたものではあるが、林家当初の学問が中国理学一辺倒でなく、本朝の国事に目配りがあつたことの端的な表れと言えよう。

(参考) 大曾根章介『江談』と『史館茗話』 川口久雄編『古典の変容と新生』 明治書院

一九八四

本問洋一編『史館茗話』 新典社 一九九七

(谷口孝介)

## 三〇 菅家文章(かんげぶんそう) 十二巻三冊

(ル 295-1)

寛文七(一六六七)年跋刊、刊記なし。 四周双边、每半葉九行每行一八字、 双魚尾(花口魚尾)。 朱墨の書き入れあり。 縦二六・六cm、横二七・〇cm。 第三冊後表紙見返しに手書きによる「元禄八(一六九五)年乙亥三月二十二日校合訖 北溟」とあり。 印記・清岡藏書記、菅原長親(二印とも清岡長親)。 子孫永保(柴野栗山)。 北氏家藏、柳軒。 虫損あり。

『菅家文章』十二巻は、平安時代前期を代表する文人政治家菅原道真(八四五〜九〇三年)がみずから自己の詩文を編定した漢詩文集。前詩後文の編成で、巻一から巻六までは漢詩をほぼ年次によつて配列する。巻七から巻十二は、詔勅や奏状などさまざまな機会に著された散文作品を分体し、それぞれ年次に配する。「献家集状」(『菅家後集』所収)があり、昌泰三(九〇〇)年に『文章』十二巻を編定し、祖父清公『菅家集』六巻、父是善『菅相公集』十巻(この二著は現存しない)とともに、醍醐天皇に献上したことが記されている。これは当時の漢詩文集の編集の実際を知ることができ、貴重な資料でもある。平安時代の漢詩文集別集が完形で現存することは珍しく、平安中期以降道真が文祖として祭祀されてきたことが、『文章』が完存したことの重要な要因となつたであろうことが窺える。自己の編定による詩文集が完存すること、この時期の政治社会、文人社会の細微にわたる生態を知ることができ、かつこの史料ともなつてゐる。

『文章』の伝来については不明な点が多いが、現伝本の多くに藤原広兼による元奥書が存する。それによると、広兼は元永元(一一一八)年から保安五(一一二四)年にかけて『文章』十二巻『後集』一巻を書写し、あわせて十三巻を天承元(一一三二)年八月八日に北野社に奉納したと言う。『文章』現伝本はすべてこの本が祖本となつてゐる。本書ももちろん広兼献納本であり、広兼元奥書を有する。巻十二巻尾の跋によると、京都の儒者福春堂慮庵が寛文七年に書肆野田某の勧めに従い、所蔵の古点本を、妄りに校訂を加えずに出版したと言う。それゆえ巻一卷頭近くには原本の破損により読めなくなつた文字があつたやうで、破損の文字を○で表している。後元禄十三(一七〇〇)年に徳川光圀によつて善本が見出され、それによつて校正された「校訂菅家文章」が出版されたおりに、この校訂により寛文刊本に見えた不明の文字は入木された。なお本書は元禄刊本刊行以前の元禄八年に他本と校合したことを記しており、全巻にわたつて朱墨により異同や『扶桑集』集付などが書き込まれている。

(参考) 川口久雄『日本古典文学大系 七二 菅家文章 菅家後集』岩波書店 一九六六  
高松寿夫『菅家文章』元禄版本本文の性格』高松寿夫・雋雪艶編『日本古代文学と白居易 王朝文学の生成と東アジア文化交流』勉誠出版 二〇一〇

(谷口孝介)

### 三二 菅家後草(かんげこうそう) 一冊

(ル 205-2)

刊記・貞享四町(一六八七)歳正月吉辰。大坂心齋橋通北久宝寺町 河内屋原七郎板。表紙打付書：菅家後草卷第十三、内題・尾題：菅家後草卷第十三。四周双辺、有界。毎半葉八行毎行一五字、双魚尾。縦二五・一cm 横一七・九cm。焼け焦げあり(裏打ち補修あり)。

菅家後草巻題十三跋(貞享丙寅(三、一六八六)年三月日、黒川道祐)。

『菅家後集』とも言う。昌泰三年『菅家文章』編定以降の道真詩文を集めたもの。成立については不明な点もあるが、最古の道真伝である『菅家伝』に、延喜三(九〇三)年謫居の地大宰府にて死に臨んで、当所にて詠じた詩をまとめて「西府新詩」とし、在京の詩友紀長谷雄に送付したと言う。『後集』には二系統の伝本があり、この「西府新詩」に基づく大宰府での詩作のみを収録したもの(参考八)と、巻頭に醍醐天皇「見右丞相献家集」を戴き、大宰府での作に『文章』編定後大宰府謫居以前の詩作七首・散文作品二篇を増補した本とである。本書は後者増補本であり、【三〇】で述べた藤原広兼による元永二(一一一九)年三月二十八日の元奥書を持ち、『文章』とともに北野社に献納された本を祖本とする。「巻十二」とあるのは『文章』十二巻とあわせて大集をなすとの発想で、『白氏文集』が『長慶集』と『後集』とをあわせて大集七十五巻として成立した事情と同じ(【一五】参照)。

本書には随所に「鎌倉本作何何」と双行注のかたちで異文注記が存する。この「鎌倉本」の本文はほぼ「西府新詩」のかたちと一致し、水戸家が博搜の結果鎌倉で得た一本がこれに当たろう。その本の存在は現在確認できないが、前田家尊経閣文庫蔵『菅家後集』甲本は鎌倉本の透写本と考えられる。十七世紀当時『菅家後集』は「如其後草、絶而僅有」(中村顧言、校訂菅家文章跋元禄十三年)と云う状態で稀覯書となっていた。十七世紀後半のこの時期に菅原氏後裔を称する加賀前田家ことに八代藩主綱紀や水戸

徳川家などによって道真および王朝の漢詩文集諸本の博搜がなされた。『後集』が『文章』の後を追って刊行されたのは、このような当時の文化の潮流に棹したものと云えよう。

なお『群書類従』巻百三十一に『菅家後集』を収める(参考八)。『類従』は言うまでもなくすでに刊行された本は収録しないのだが、この『後集』が貞享刊本とは別系統の鎌倉本の系譜に連なるいわゆる「西府新詩」であるゆえの所為である。その埒保己一の跋に「西府新詩一卷／右菅家後集以予所藏古本写之得一摺紳家秘本対照訂正」とある。保己一が水戸家の蔵書を見得たこともあり、内部徴証からここに言う「一摺紳家秘本」とは水戸彰考館文庫蔵本を指す。

(参考) 谷口孝介『菅原道真の詩と学問』塙書房 二〇〇六

(谷口孝介)



### 三二 鈴木虎雄関係史料 より 四件

二〇一〇年三月、中国文学者・漢詩人・歌人として知られる鈴木虎雄の関係史料七六四点（六一二冊）が、ご子孫から当館に寄贈され、「鈴木虎雄関係史料」として一括して整理された。

鈴木虎雄（一八七八～一九六三）は、近代日本における中国文学・文化研究（中国学）の創始者の一人として知られており、一九六一年に文化勲章を受章している。虎雄は本学にも縁があり、一九〇五年に本学の前身校である東京高等師範学校の講師の嘱託を受けたが、一九〇八年に京都帝国大学文科大学助教授に転じ、以降は京都帝大で研究を進めるとともに、吉川幸次郎等多くの中国文学者を育てた。また、文学研究のかわら、豹軒（ひょうけん・漢詩）、葯房（やくぼう・短歌）と号して自らも多くの漢詩や短歌を作った。本史料中にも膨大な自作の詩文稿が含まれているが、本史料の展示公開は今回が初めてであり、未公表のものも多数含まれている詩文稿等の全貌の解明は今後の研究をまつことになる。今回はこの史料群から四件のみではあるが、詩稿を中心に紹介する。

（篠塚富士男）

### 「杜詩訳解成題後二首」ほか 一状

（919.6-Su96-2-197-4）

著者畢生の訳業である『杜少陵詩集』全四巻の執筆途上および完成時の懐いを詠んだ七絶五首を一枚の懐紙に墨書したもの。「豹軒学人識」と署するが年紀はない。

杜老生涯旅苦中、卜居錦水復西東。

杜老の生涯旅苦の中、居を錦水に卜するも復た西東す。

船窓積到巴園卷、客淚數行下夜風。

船窓に積し到る巴園の巻、客淚數行夜風に下る。

〔昭和己巳（四一九二九）年〕八月航欧舟中釈杜詩

月出空山鵲繞枝、新秋爽氣透窗帷。

月空山に出で鵲枝を繞る、新秋の爽氣窗帷を透る。

神来走筆如風雨、注到少陵上水詩。

神来りて筆を走らす風雨のごとし、注し到る少陵上水の詩。

丹心白首病郎官、句句憂愁血淚殘。  
蕭寺更深尋本義、四山風雨一燈寒。

丹心白首病郎の官、句句憂愁血淚残す。蕭寺にて更に深く本義を尋ぬ、四山風雨一燈寒し。

〔辛未（六一九三二）年〕八月寓高野山中釈杜詩二首

老杜文章日月光、經綸比興各擅場。

老杜の文章日月の光、經綸と比興と各おの場を擅にす。

千年枉托鍾期後、却学朱家經解方。

千年枉げて托さる鍾期の後、却って学ぶ朱家經解の方。

理氣講来大道傾、真詩滅却疏箋成。

理氣講じ来つて大道傾く、真詩滅却し疏箋成る。

誠心正意培根本、須頼風騷養性情。

誠心正意根本を培う、須らく風騷に頼りて性情を養うべし。

〔辛未九月杜詩訳解成題後二首〕

第一の詩題にいう「航欧舟中」とは、昭和四年に「欧州差遣の公命を蒙」（杜詩釈義中冊の起稿につき読者諸君に一言す）り、神戸埠頭より出航した箱根丸船中でのことをいう。『杜少陵詩集』第二冊中の第十巻から第十二巻まで詩解はこの航行船中での執筆であった。第二冊末尾に「昭和四年八月十七日午後十時二十分英京に向ひビスケ―湾航海中箱根丸船室に於て稿了」と記されている。この詩は今回の自身の渡航に杜甫の流浪の旅途を重ねて詠懐している。第三句の「巴園」は四川省閬中県を言い、第十二巻のなかほどからこの時期の詩となっている。後京都大学退官の年に出版された『豹軒詩鈔』（一九三八年【参考九】（ル295-567））巻十一には「船中釈杜詩書感」として所収。

第二、第三詩は、昭和六年八月二十一日から九月五日まで、高野山蓮花谷三宝院に寄寓していたおりの「山中雜詩五首」のうちの二首。『豹軒詩鈔』巻十二では第二詩末に「詩予寓院注杜詩」と自注がある。奥深い山中の静けさのなかで、杜詩注解を進めているさまが詠じられている。第二詩結句「上水詩」とは『杜少陵詩集』第四冊第

二十二巻の「上水遺懐」を言う。この詩はまさに第三詩の起句承句が言う、詩人の辛苦の人生に対する感慨を詠じたものである。

第四、第五詩は、『豹軒詩鈔』巻十二では「杜詩訳解成自題其後二首」として収められ、題下注に「九月二十四日」と記されている。『杜少陵詩集』第四冊の昭和六年十月二日付け「杜少陵詩集訳解の後に書す」に「去月二十四日秋季皇霊祭日の午後三時頃最終原稿を書き了つた」とあることから、まさに全詩を訳解し終えた直後の感慨であることが分かる。この訳解が杜詩の真意を曲げているのではと恐れつつも、「朱家経解の方」により「作者の本意以外には一字も蛇足を添へぬ」（同前）意志を貫いたことを自負するものである。

なお本詩稿末に「右第二首起二句改為「理気細微穿道体、疏箋牽強失詩精」と記されており、この改作のかたちで『豹軒詩鈔』には収められている。ただし『詩鈔』ではもう一箇所結句「風騷」が「真詩」と改められている。

### 「杜詩訳解成自題其後」一状

(919.6.Su96.3-245-3)

前項で述べた第五の七絶詩を軸物用に二行に墨書したものの。「昭和辛未九月」とあるが、これは詩題を記したもので、実際の揮毫年は不明。「豹軒」と署す。本文は詩題に年紀を冠する以外は『豹軒詩鈔』のかたちに同じい。起句承句の「理気細微にして道体を穿つ、疏箋牽強にして詩精を失う」は前項に見た原詩に比して、対句に整えられたことで、朱子の細微な経解の方法に対して、それを倣ってはいるもののこの訳解が杜詩の真意を失ったのではないかという危惧がより明瞭に詠出されている。

### 「豹軒退休集葯房主人歌草先後刊成志感二首」一色紙

(919.6.Su96.3-258-3)

昭和三十一年（一九五六年）喜寿の作。五絶二首を色紙に墨書する。「豹軒老人」と署す。

晴聰安浄几、繙閱七千詩。

一部退休集、形神俱在茲。

歌草退休集、二書先後成。

願君文字底、仔細酌其情。

晴聰浄几に安んじ、繙閱す七千の詩。

一部の退休集、形神俱にここに在り。

歌草・退休集、二書先後して成る。

願わくは君文字の底に、仔細にその情を酌まんことを。

豹軒退休集葯房主人歌草

先後刊成志感二首

昭和丙申春 豹軒老人

昭和三十一年一月に漢詩集『豹軒退休集』（弘文堂）が、同四月に和歌集『葯房主人歌草』（アミコ出版社）が、相次いで喜寿を記念して出版された。この二首は二書の刊行後の感慨を詠う。それらの作品群に作者の志が具現されていることを言う。言うまでもないが、昭和十三（一九三八）年に出版された『豹軒詩鈔』には未収録の詩。

### 「山鹿素行先生宅址銅像」一色紙

(919.6.Su96.2-58-12)

昭和三十七（一九六二）年十月の作。虎雄は翌三十八年一月に八十六歳で逝去する。最晩年の色紙墨書。七絶一首。「豹軒老人」と署す。

四十七人同死生、報仇一旦世初驚。

四十七人死生を同じうす、仇を報えば一旦世初めて驚く。

等身語類出忠士、素行先生萬代名。

等身の語類忠士より出ず、素行先生萬代の名。

山鹿素行先生宅址銅像

昭和壬寅十月 豹軒老人

赤穂城址にある山鹿素行銅像を題として詠じた七絶。この像は、元来大正十四（一九二五）年の山鹿素行二百四十回忌記念に赤穂城二之丸謫居跡に建立されたもので、第二次世界大戦の際、供出されて台座だけになっていたが、昭和三十三年（一九五八）年に同地に再建された。この詩はこの再建された銅像を詠じたもの。兵学者・儒学者として高名な山鹿素行（一六二二〜一八八五）は、承応元（一六五二）年から万治三（一六六〇）年の間、赤穂藩主浅野長直に一千石で召抱えられた。大石良雄はそのおりに教えを受けている。

（参考）小川環樹「あとかぎ」『杜詩 第八冊』岩波書店 一九六六

森岡ゆかり『近代漢詩のアジアとの邂逅―鈴木虎雄と久保天随を軸として―』勉誠出版

二〇〇八

中野目徹「鈴木家所蔵「鈴木虎雄関係史料」の概要」『近代史料研究』九 二〇〇九

篠塚富士男「鈴木虎雄関係史料」『筑波大学附属図書館年報 二〇一〇年度』二〇一一（谷口孝介）



## 企画

筑波大学大学院人文社会科学部研究科

川那部保明（研究科長）

谷口孝介（教授）

筑波大学附属図書館

波多野澄雄（館長）

逸村裕（副館長・研究開発室長）

関川雅彦（副館長）

附属図書館研究開発室

大塚秀明（大学院人文社会科学部研究科准教授）

## 附属図書館特別展ワーキンググループ

篠塚富士男（主査）

嶋田晋

大澤類里佐

山中真代

仲川敦子

岡田信子

村尾真由子

福井恵

## 特別講演会「日本人のよんだ漢籍」

平成23年10月9日 13:30～15:30

講師 谷口孝介（大学院人文社会科学部研究科教授）

## 特別展オフィシャルWebサイト

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/>

## 特別展Twitterアカウント

@tulips\_tenji

平成23年度 筑波大学附属図書館特別展

日本人のよんだ漢籍 — 貴重書と和刻本と —

平成23年9月22日 発行

発行 筑波大学附属図書館 ©2011

〒305-8577

茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL 029-853-2376

印刷 前田印刷株式会社



 筑波大学  
*University of Tsukuba*

